

雜餉隈周辺遺跡群

雜餉隈遺跡 6 次調査

南八幡遺跡 7 次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第528集

1997

福岡市教育委員会

雜餉隈周辺遺跡群

Zasshonokuma
雜餉隈遺跡 6 次調査

Minamihachiman
南八幡遺跡 7 次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第528集



遺跡略号 ZSK6 MHM7
調査番号 9431 9560

1997

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口として栄えた福岡市には、多くの文化財が分布しています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書はそうした遺跡のひとつで、福岡市の南端、南福岡駅、雑餉隈駅周辺に広がる博多区雑餉隈遺跡、南八幡遺跡内の共同住宅建設に先だって行った発掘調査の成果報告書です。

発掘調査の結果奈良時代の住居跡を主とした遺構、遺物が見つかりました。今回の調査を初めとする近年の調査成果の積み重ねにより、とくにこの地域に奈良時代のムラが広い範囲に広がっていたことが明らかになりつつあります。大宰府や、鴻臚館を支えた人々の生活が次第に見えてきたと言えるでしょう。

発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた信国征八郎様、藤義治様を始めとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますと共に、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町 田 英 俊

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先だって、福岡市教育委員会が1994年8月8日～9月5日にかけて行なった雉飼隈遺跡第6次調査、同じく共同住宅建設に先だって1996年3月4日～3月18日にかけて行なった南八幡遺跡第7次調査の報告書である。二つの遺跡は地理的にも性格的にも強い関連性を持つので、仮の総称として、書名を雉飼隈周辺遺跡群とした。雉飼隈遺跡としては3冊目、南八幡遺跡としては7冊目の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本章では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、溝2のように記述する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、加藤隆也の外、井上蘭子（現福岡市教育委員会）、平田こずえ、今泉博子、鈴賀智幸（別府大学）、岩崎秀幸（西南学院大学）、内田直美、田之上裕子、池端真小子、村上真由美、中池佐和子、石原華留奈（大谷女子大学）、李準浩（東京大学）、福田朱美、藤川繁昌、吹春憲治が作成した。製図は宮井の他林山紀子の協力を得た。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他西村智道、井上蘭子が作成した。また製図は宮井の他林山紀子の協力を得た。
6. 本書使用の写真は宮井、加藤が撮影したものである。
7. 遺物実測図の括弧内の番号は収蔵時の登録番号である。遺構図中の遺物出土状況図の番号はこちらに一致し、遺物実測図中の枝番号ではない。注意されたい。
8. 本調査に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本書の執筆は宮井、加藤が行い、編集は両者協議の上宮井が行なった。

本文目次

第1章 雜餉隈遺跡、南八幡遺跡周辺の地理的、歴史的環境	1
第2章 雜餉隈遺跡第6次調査	5
1. 調査に至る経緯	5
2. 調査体制	5
3. 調査の記録	5
(1) 住居跡	5
(2) 土壙	6
(3) 挖立柱建物	21
4. 小結	21
第3章 南八幡遺跡第7次調査	29
1. 調査に至る経緯	29
2. 調査体制	29
3. 調査の記録	29
(1) 掘出遺構	29
(2) 出土遺物	32
4. 小結	39

挿図目次

第1章 雜餉隈遺跡、南八幡遺跡周辺の地理的、歴史的環境

Fig. 1 麦野、雜餉隈遺跡群周辺の遺跡(1:25000)	2
Fig. 2 調査地点と周辺の既調査地点(1:4000)	3

第2章 雜餉隈遺跡第6次調査

Fig. 3 調査区遺構配置図(1:200)	6
Fig. 4 住居跡15実測図(1:40)	7
Fig. 5 土壙実測図1(1:40)	8
Fig. 6 出土遺物実測図1(土壙1～5 1:3)	9
Fig. 7 土壙実測図2(1:40)	10
Fig. 8 出土遺物実測図2(土壙6～9 1:3)	11
Fig. 9 出土遺物実測図3(土壙10 1:3)	13
Fig. 10 出土遺物実測図4(土壙11、12 1:3)	14
Fig. 11 出土遺物実測図5(土壙12、13 1:3)	16
Fig. 12 出土遺物実測図6(土壙13 1:3)	17
Fig. 13 出土遺物実測図7(土壙13、14 1:3)	19
Fig. 14 出土遺物実測図8(土壙13～19 1:3)	20
Fig. 15 土壙実測図3(1:40)	22
Fig. 16 出土遺物実測図9(土壙21 1:3)	23

Fig. 17 土壌実測図 4 (1:40)	24
Fig. 18 出土遺物実測図10(土壌21~26 1:3)	25
Fig. 19 土壌実測図 5 (1:40)	26
Fig. 20 出土遺物実測図11(土壌27 1:3)	26
Fig. 21 挖立柱建物実測図(1:60)	27
Fig. 22 出土遺物実測図(鉄、石、土製品 1:2)	28
Fig. 23 雜餉限遺跡の奈良時代集落(1:2500)	28
第3章 南八幡遺跡第7次調査	
Fig. 24 調査区位置図(1:500)	30
Fig. 25 調査区構配図(1:100)	31
Fig. 26 住居跡実測図(1:60)	33
Fig. 27 土壌実測図(1:60)	34
Fig. 28 住居跡1 出土遺物実測図 1 (1:3)	35
Fig. 29 住居跡1 出土遺物実測図 2 (1:3)	36
Fig. 30 住居跡1 出土遺物実測図 3 (1:4)	37
Fig. 31 住居跡1 出土遺物実測図 4 (1:4)	38
Fig. 32 住居跡1 出上遺物実測図 5 住居跡2、4 出土遺物実測図(1:2 1:3)	40

図 版 目 次

(雑餉限遺跡第6次)

- PL. 1 (1) 土壌11~14 (東から) (2) 挖立柱建物 1 (西から)
- PL. 2 (1) 住居跡15 (北から) (2) 土壌 5 土層 (北から)
 - (3) 土壌 1 土層 (北から) (4) 土壌 9 土層 (北から)
 - (5) 土壌12土層 (東から) (6) 土壌21土層 (北から)
- PL. 3 (1) 土壌10 (東から) (2) 土壌21 (西から)
 - (3) 土壌25 (北から) (4) 土壌26 (北から)
 - (5) 土壌27 (北から)
- PL. 4 (1) 西半区全景 (北から) (2) 東半区全景 (北から)
- (南八幡遺跡第7次)
- PL. 5 (1) 南半区全景 (北から) (2) 住居跡 1 (北から)
- PL. 6 (1) 住居跡 2 (北から) (2) 住居跡 1 竪 (東から)
 - (3) 北半区全景 (西から)

第1章 雜餉隈遺跡、南八幡遺跡周辺の地理的、歴史的環境

雜餉隈遺跡、南八幡遺跡は、東を大野城市、西を春日市に挟まれた福岡市の最南端に位置する。地形的には春日丘陵の東辺にはほぼ平行して伸びる台地上に立地する。この台地は北西方に向から多くの谷が入り込んでおり、数条の舌状台地状をなす。この舌状台地ごとに、南八幡遺跡、雜餉隈遺跡、麦野A～C遺跡などに分けられているが、その地形的な境界は判然としない。今仮にJR南福岡駅、N R 雜餉隈駅周辺に展開する南八幡遺跡、雜餉隈遺跡、麦野A～C遺跡の総称として、麦野・雜餉隈遺跡群という名称を用いたい。以下この遺跡群の歴史的展開について略述する。

麦野・雜餉隈遺跡群で最も遡る遺物としては、麦野A遺跡1次地点で旧石器時代の石刃、剝片が出土している。後世の造構の覆土からの出土である。

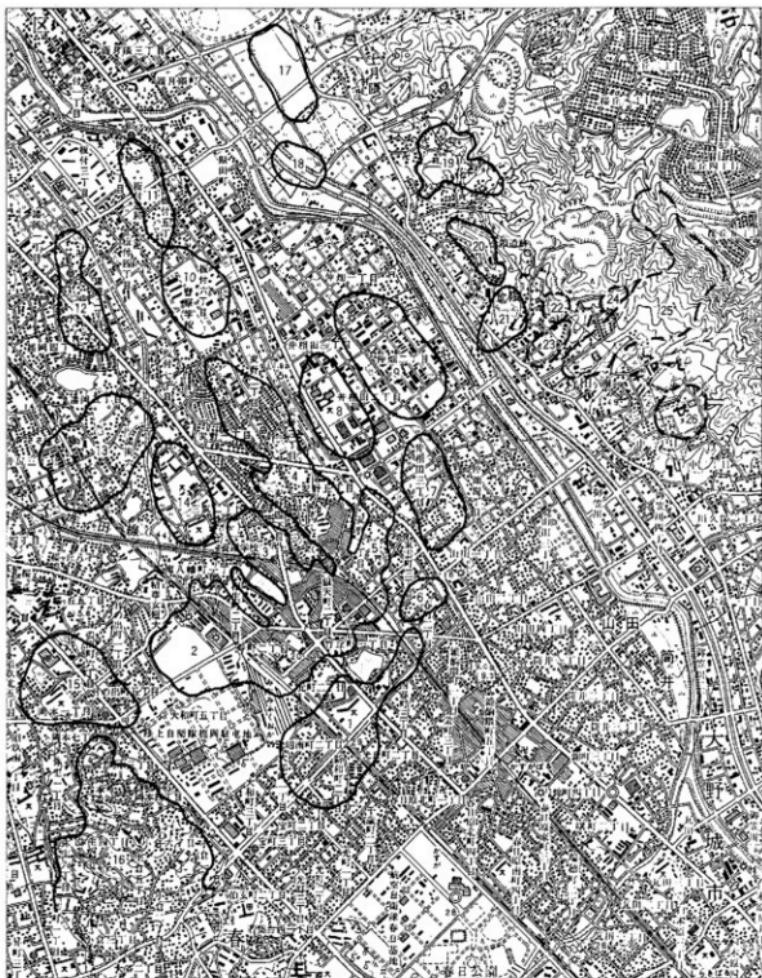
これに続く縄文時代の造構、遺物についてもはつきりしない。麦野C遺跡3次地点では該期の石鏃が出土している。但しこれも後世の搅乱からの出土品である。造構としては最近、麦野B遺跡3次調査地点で、該期の落とし穴ではないかといいう遺構が検出されているといいう。ただ時期を明らかにする遺物がまったく出土していないことなので、確定はできないようである。この他、縄文時代については晩期突帯文期に至るまで、確実な造構、遺物に恵まれていない。

弥生時代に入ると、造構、遺物とも増加が見られる。既に前期段階には、雜餉隈5次地点から住居跡（と考えられる方形土壙）、方形の貯蔵穴等が検出されている。中期段階にも同じく雜餉隈5次地点から、円形の住居跡が検出されている。住居の中には径8mほどの比較的大形のものを含み、また須玖遺跡群、岡本遺跡群にも近いことから、比較的規模の大きい拠点集落があった可能性もある。後期には雜餉隈5次地点では造構が見られなくなり、他の地点でも造構が希薄であるが、南八幡遺跡5次地点では、方形の住居が検出されている。

古墳時代に入つても造構、遺物は不明な点が多い。とくに前期、中期の造構、遺物は全くといっていいほど見られない。後期に入ると、南八幡遺跡2次、3次地点で住居跡が検出されている。隣合う調査区である2次、3次地点合わせて7基の住居が見つかっており、一定の広がりを持つ集落が展開していたことが推測される。しかしこの集落は奈良時代の大規模な集落には直接つながっていないようである。

7世紀末から8世紀にかけては大きな画期である。雜餉隈遺跡9次地点では7世紀末ないし8世紀初頭に、方形の配置を持つ大形建物群が現われる。その規模と配置は官衙的性格を思わせるものがある。8世紀中頃から後半に至ると集落は遺跡群全域で爆発的に増加する。各遺跡群などの地点を掘つても、該期の住居に当らないことがないと言っても過言ではない。これらの住居は例えば雜餉隈遺跡5次、8次地点合わせて5200m²の中に56基と、かなりの高密度で分布する。当然遺跡群全体としては粗密はあったろうが、それにしても該期の村落景観は相当壯觀なものがあったと想像される。この集落の契機としては大宰府、水城、大野城などの国家的規模の土木事業ないしはその維持、營繕に関するものと推測していたが、雜餉隈遺跡9次地点の大形建物の検出により、その可能性は高まつたように思われる。但し、8世紀後半にはこれら国家的構築物の創建はほぼ終息していたであろうから、そのための集落とは考えがたい。

なおこれらの集落は9世紀に下る物はほとんど見られない。遺跡群内では麦野A遺跡3次調査で井戸が1基見つかっている程度である。その後の中世前半期も造構は希薄であるが、中世後半では麦野A遺跡1次地点で、15世紀代の集落が検出されている。



1. 雜鶴隈遺跡 2. 南八櫻遺跡 3. 安野C遺跡 4. 安野A遺跡 5. 安野B遺跡 6. 井相田B遺跡 7. 井相田A遺跡 8. 井相田C遺跡 9. 仲島遺跡 10. 高畠遺跡 11. 板谷遺跡 12. 矢間乃遺跡 13. 岩原遺跡 14. 三筑遺跡 15. 倶狹遺跡群 16. 囲本遺跡群 17. 下月漢C遺跡 18. 立花寺B遺跡 19. 立花寺A遺跡 20. 全體遺跡 21. 全體上岸敷遺跡 22. 影ヶ浦遺跡 23. 持田ヶ浦古墳群 24. 堀ヶ浦古墳群 25. 持田ヶ浦古墳群 26. 御陵古墳群

Fig. 1 麦野、雜鶴隈遺跡群周辺の遺跡(1:25000)

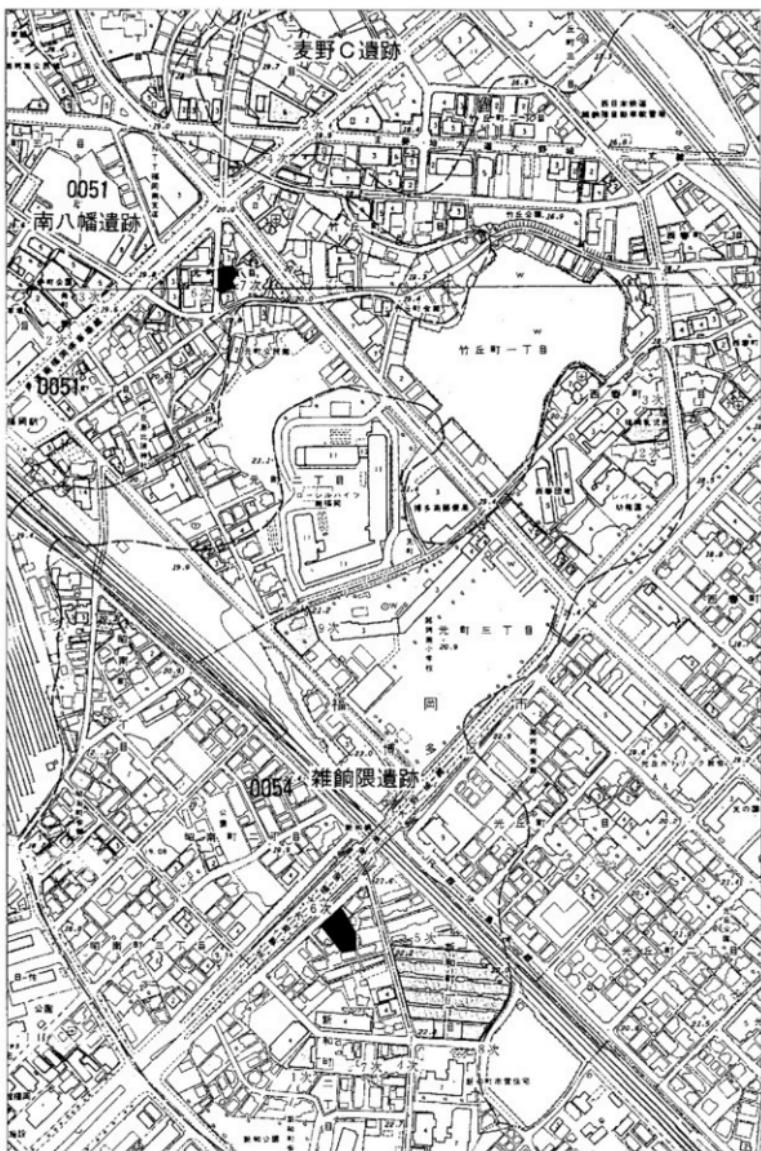


Fig. 2 調査地点と周辺の既調査地点(1:4000)

遺跡	次数	所在地(すべて博多区)	概要	報告書
雑錦隈	1	新和町2丁目10-2、6	奈良時代の土壤	276
雑錦隈	2	西春町1丁目17-27	奈良時代集落	409
雑錦隈	3	西春町1丁目18	奈良時代集落	409
雑錦隈	4	新和町2丁目13	奈良時代土壤、掘立柱建物	409
雑錦隈	5	新和町1丁目2-6	弥生時代、奈良時代集落	
雑錦隈	6	新和町2丁目1-35	奈良時代土壤、掘立柱建物	528(本書)
雑錦隈	7	新和町2丁目14-1	奈良時代土壤、掘立柱建物	
雑錦隈	8	新和町1丁目7	奈良時代集落	
雑錦隈	9	元町3丁目1	奈良時代大形掘立柱建物	
南八幡	1	南八幡2丁目8-5	古墳時代溝	489
南八幡	2	寿町2丁目119-1	古墳時代、奈良時代集落	128
南八幡	3	寿町2丁目4-12	古墳時代、奈良時代集落	181
南八幡	4	寿町2丁目86-1、2	時期不明掘立柱建物	277
南八幡	5	寿町2丁目84、85-1	弥生時代後期住居	441
南八幡	6	元町1丁目19-4	奈良時代集落	501
南八幡	7	元町1丁目20-2	奈良時代集落	528(本書)
麦野A	1	麦野1丁目28-56	中世後期集落	107
麦野A	2	麦野5丁目		
麦野A	3	麦野4丁目14-23	奈良時代、中世集落	275
麦野A	4	麦野1丁目27-3、5	平安前期井戸	409
麦野A	5	麦野1丁目27-1、2	古代井戸	
麦野B	1	麦野4丁目26-32	奈良時代、中世井戸	164
麦野B	2	南本町31-1、2	奈良時代集落	
麦野B	3	南本町2丁目3	奈良時代集落、旧石器	
麦野C	1	麦野6丁目11-4	奈良時代集落、旧石器	361
麦野C	2	銀天町2丁目4	奈良時代集落	
麦野C	3	銀天町3丁目14	奈良時代集落	501
麦野C	4	銀天町2丁目3-6	奈良時代集落	

Tab. 1 麦野・雑錦隈遺跡群調査一覧

第2章 雜餉隈遺跡第6次調査

1. 調査に至る経緯

1993年2月23日付けで、信国征八郎氏より、共同住宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である雑餉隈遺跡内に位置しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて93年3月10日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、信国氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなった。当時調査予定地に近接して、第2係員である宮井が雑餉隈遺跡5次調査を行っていた。これは市営住宅建替えに伴う調査で、面積5,000m²に及ぶ調査を行っており、これと平行しながら進める予定で行程の調整を測っていたが、折悪く5次調査の反転後の遺構検出と6次の遺構検出が時期的に重複し、二調査地点の同時進行が難しくなった。そのため同じく第2係の加藤の応援を得て、1994年8月8日に着手し、9月5日に終了することができた。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花剛（前）、町田英俊（現）

調査統括 埋蔵文化財課 課長 折尾学（調査年度） 荒巻輝勝（整理年度）

第2係長 山崎純男（調査年度） 山口謙治（整理年度）

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 吉田麻由美（調査年度） 西田結香（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 加藤隆也、宮井善朗

調査補助 平田こずえ、今泉博子（別府大学）、岩崎秀幸（西南学院大学）、川野博之（熊本大学）、内田直美、田之上裕子、池端真小子、村上真由美、中池佐和子、石原華留奈（大谷女子大学）、李準浩（東京大学）

整理作業 西村智道（現大刀洗町教育委員会） 井上蘭子（九州大学、現福岡市教育委員会） 大石加代子、林由紀子、太田順子、武田祐子

なお調査作業に協力いただいた作業員の方々のお名前は、当時平行して行われていた雑餉隈遺跡5次調査と完全に重複しているため、來年度発行予定の5次調査の報告書をご参照願いたい。また調査時には信国氏に、多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	9431		遺跡略号	ZSK-6
調査地地番	福岡市博多区新和町2丁目1-35			
開発面積	688.8m ²	調査対象面積	374m ²	調査面積
調査期間	1994年8月8日～9月5日		分布地図番号	13-0050

3. 調査の記録

今回調査で検出した遺構は、住居跡と考えられる方形の遺構1基、掘立柱建物2棟、円形、長方形、不定形の土塊群、ピットなどである。土塊群からは相当量の遺物が出土しており、ほとんど奈良時代に属する。近接した4次、5次調査地点と一連の集落で、その縁辺に当る位置と考えられる。

(1) 住居跡

住居跡15(Fig. 4)

調査区の南東隅に位置し、遺構の大部分は調査区南側に伸びる。一辺2.7m、深さ65cmを測り、壁はまっすぐ立ち上がる。

出土遺物 (Fig. 14)

Fig. 14の122、123はいずれも須恵器。123の蓋は径が大きく、端部の外面は凹面をなす。つまみの径は2.7cmを測る。天井部はヘラ削りを施す。

(2) 土壙

土壤1 (Fig. 5)

調査区南端に位置し、南側は調査区外にのびる。平面は不整梢円形を呈すると思われ、径は2.3mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

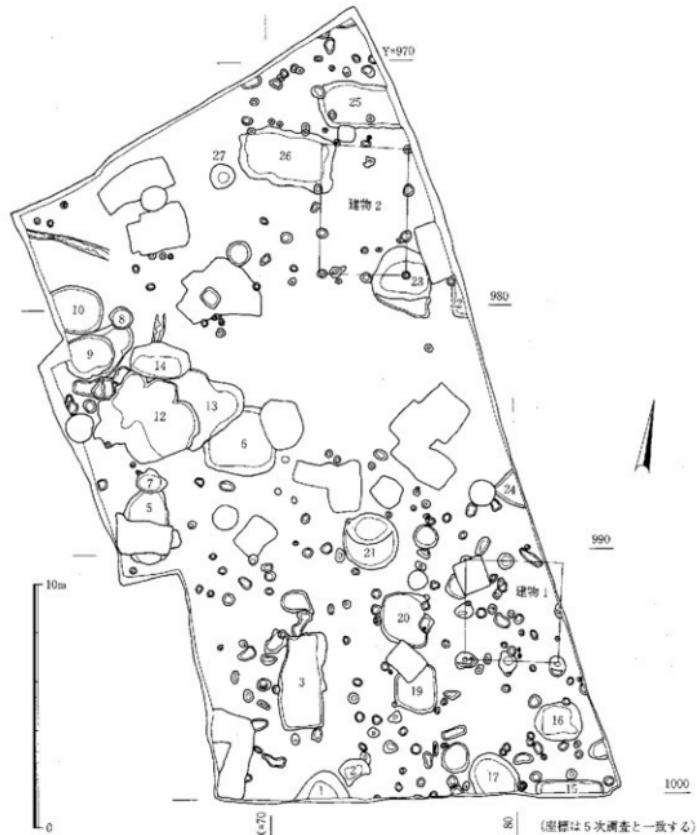


Fig. 3 調査区遺構配置図(1:200)

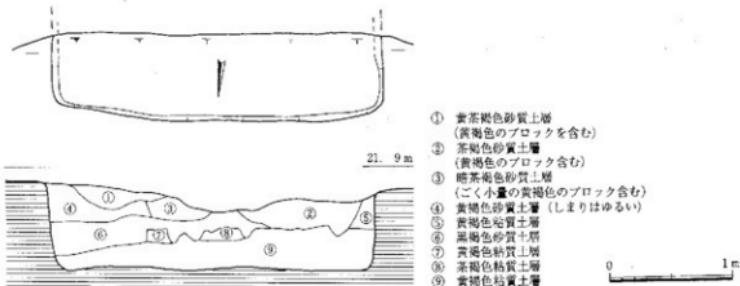


Fig. 4 住居跡15実測図(1:40)

出土遺物(Fig. 6)

1はつまみが剥離している。天井部ヘラ削りを施す。2の高台は断面台形で低い。3は小形の土師器壺で、胴部内面は削りを施す。

土壤3 (Fig. 5)

調査区の南西に位置し、平面は不整長方形を呈する。長径3.9m、幅1.7mを測る。壁の立上りはやや強い。

出土遺物(Fig. 6)

4は土師器の把手。5は須恵器壺。高台は棱の甘い方形で、底部端よりやや内側に付く。6は須恵器壺蓋。端部は坦面をなす。天井部ヘラ削り。7は土師器壺の底部である。

土壤5 (Fig. 5)

調査区西側に位置し、中央部は擾乱に切られる。平面は不整橢円形を呈し、長径約3.2m、短径約1.8mを測る。壁の立上りは弱い。

出土遺物(Fig. 6)

8～10は土師器壺。いずれも外面ハケメ、内面削りであるが、8の内面には縦方向のハケメが見られる。10の口縁部は余り開かない。11、12は床面近くで出土した須恵器壺身である。ほぼ完形で出土。直に近い立上りで、低い高台が付く。

土壤6 (Fig. 5)

調査区ほぼ中央に位置し、平面は不整形を呈する。長径2.9m、短径2mを測り、造構の南側壁は北側に比べ、立上りが強い。

出土遺物(Fig. 8)

13～19が土壤6出土遺物である。13は須恵器壺蓋。口縁をわずかに欠くがほぼ完形。天井部はヘラ削り。14、15は須恵器壺身。15は口縁端が外反する。13、14は出土状況を図示しているが、床面からはかなり浮いた状態である。16～19は土師器。17の外面には非常に細かいハケメが施される。Fig. 22の1は土壤6出土の鉄器である。刀子と考えられる。

土壤7 (Fig. 3)

土壤5を切る小穴である。土師器壺が出土している(Fig. 8の20)

土壤9 (Fig. 7)

土壤9から13にかけての、調査区北西端の土壤群は、集落縁辺部に継起的に掘削されていった廃棄土壤群と考えられる。調査区は南東から北西にかけて緩やかに低くなり、検出面も白色の八女粘土面

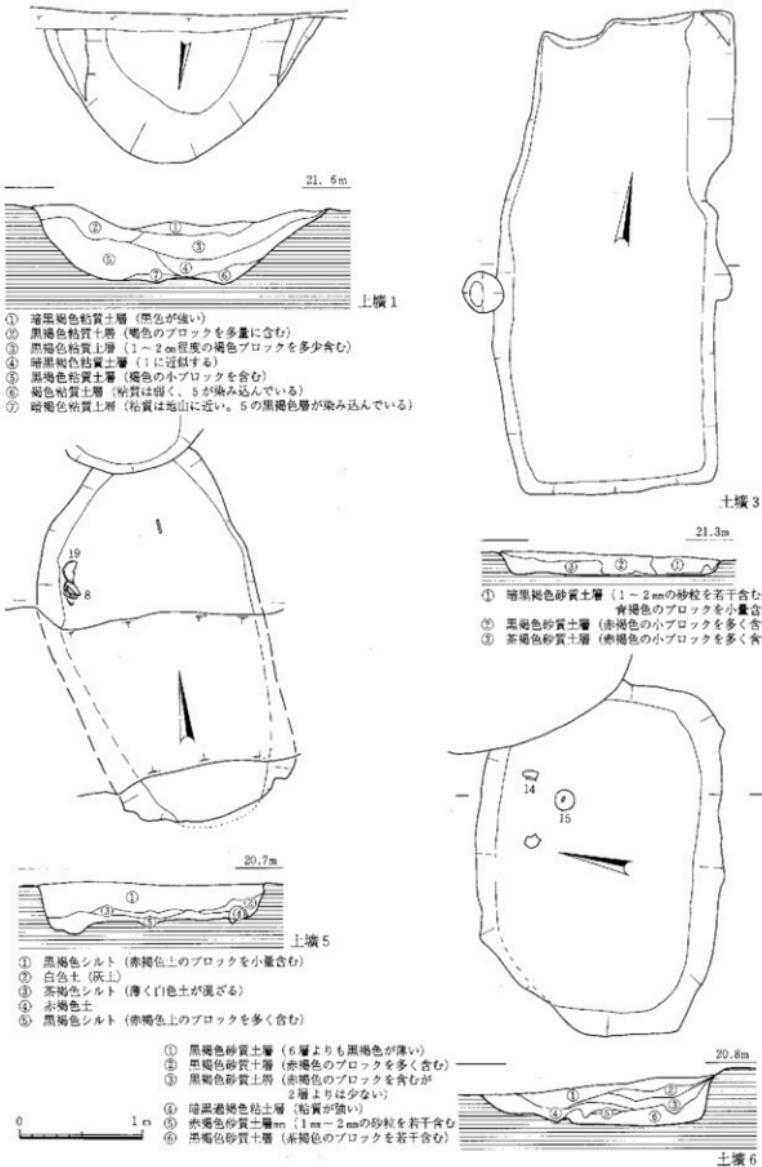


Fig. 5 土壌実測図 1 (1:40)

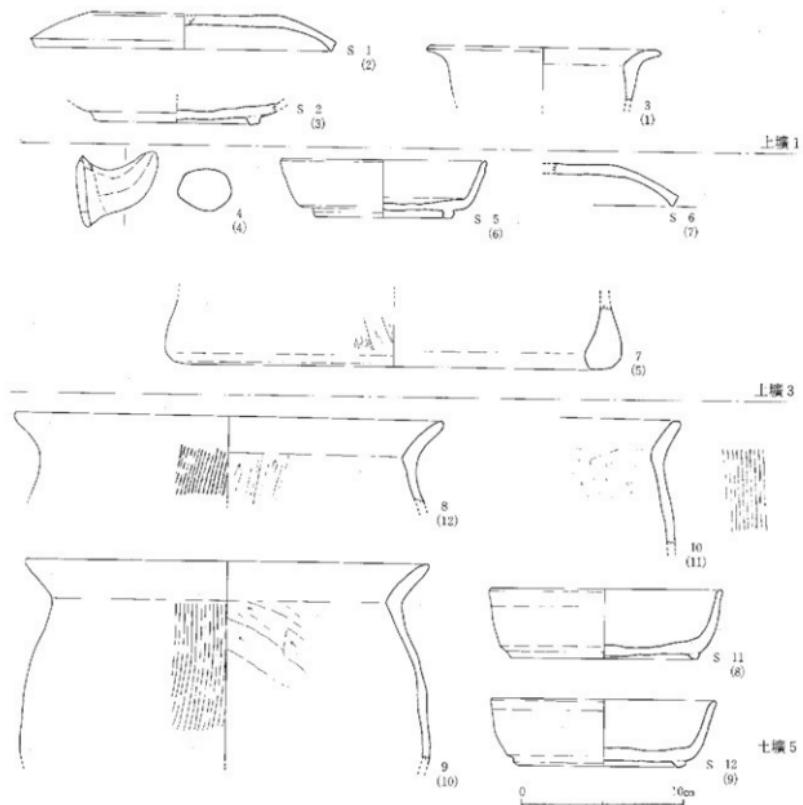


Fig. 6 出土遺物実測図 1 (土壤 1 ~ 5 1:3)

へと変化していく。更に北西方向の先には谷筋が想定されるのであろう。土壤群はいずれも円形もしくは小判形を基調としつつも不定形をなし、また覆土が非常に類似して検出面での切り合が不明確である。出土遺物にも大きな時期幅は認められない。これらのことからこの土壤群については、廃棄空間として設定された地点に、少しずつ場所を違えながら、次から次に廃棄土壤が乱雑に掘り返された状況が想定されよう。

上廣 9 は平面は不整円形を呈し、長径は 2 m を測る。遺構の壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 (Fig. 8)

21~26は、土壤 9 と後述する土壤 10、およびその東側に位置する土壤 8 を検出する際に出土した遺物である。21~25は高台付の壺。21はやや大形になる。高台はいずれも低い。22のようにはば直立す

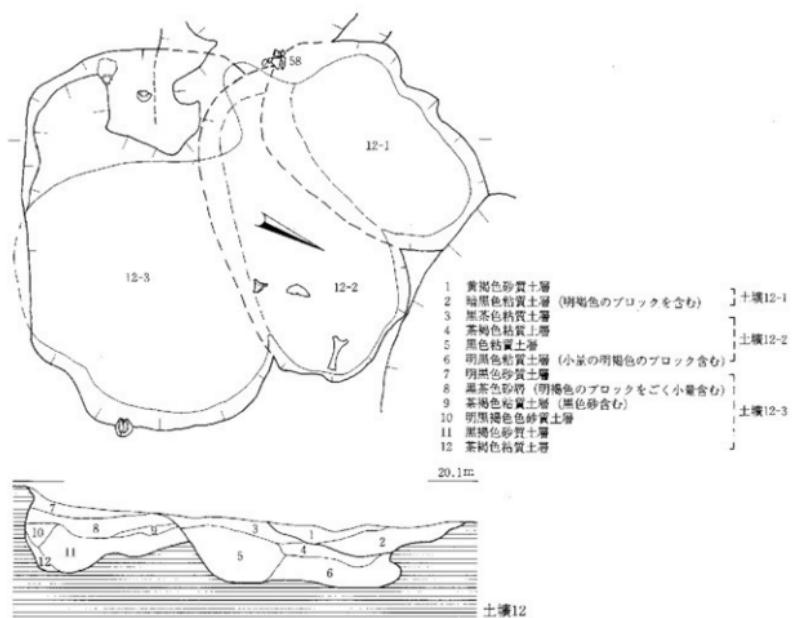
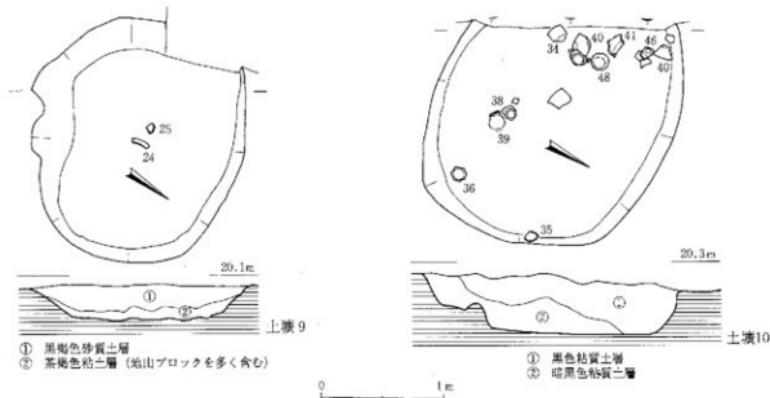


Fig. 7 土壤実測図 2 (1:40)

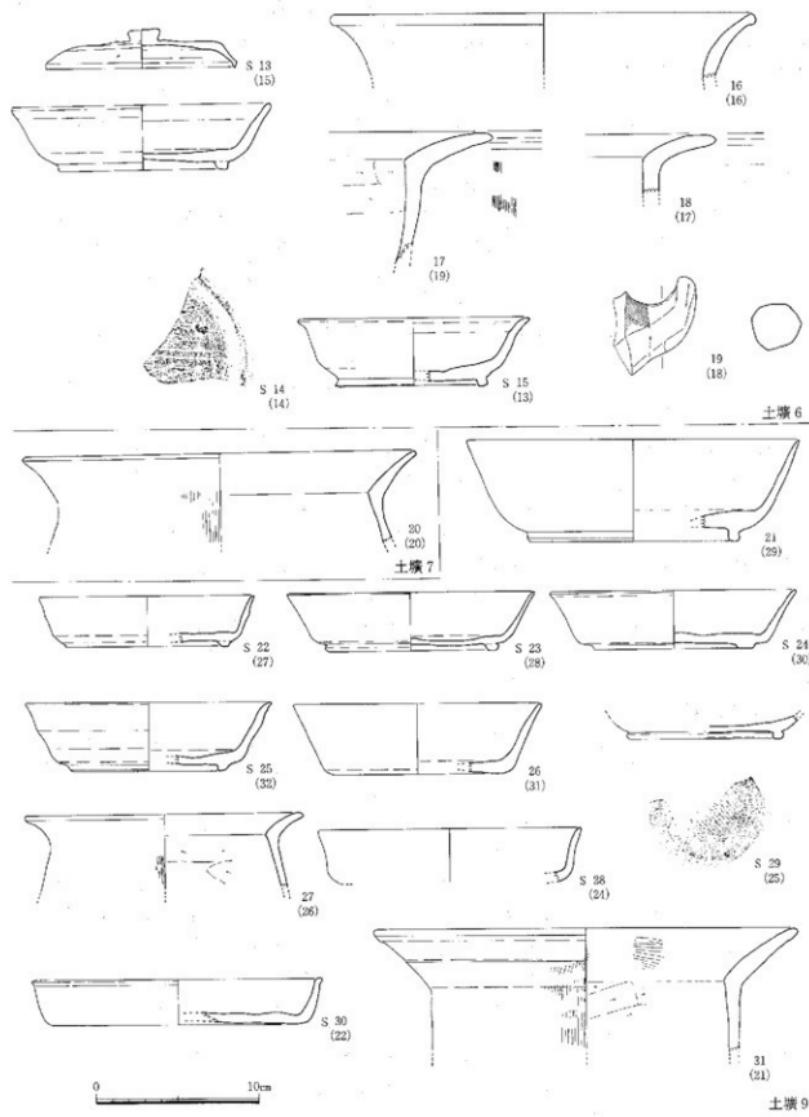


Fig. 8 出土遺物実測図 2 (土壤 6 ~ 9 1:3)

るものと、その他のように体部が開くものがある。26は高台のない土師器坏である。27~31は土壙9に伴うもの。28は径が大きく体部が直立する。高台の有無は不明。30は高台がなく浅い。28~30は須恵器、他は土師器壺である。

土壙10(Fig. 7)

土壙9の北側に位置し、北西側は調査区外へ伸びる。平面は不整円形を呈し、高台付坏などの遺物が確認された。

出土遺物(Fig. 9)

遺物は、中央の床からやや浮いた位置と、西壁際の床面からまとまって出土している。32~44は須恵器、45~47は土師器である。32は蓋。遺存部が少ないが天井はヘラ削りのようである。33~40は高台付の坏。法量は34~38、39、40の三種類ほどに分かれよう。いずれも高台は低い。41は短頸壺。肩部から上は叩き目をナデ消す。42は鉢。屈曲部以下をヘラ削りする。43は高台付の壺。胴部下半にヘラ削りを施す。44は短脚の高台付脚部。内外面とも回転ナデ。46は手づくねの土師器鉢。45は土師器の皿。底部はヘラ切りの後ナデしている。47は小形の壺。内面はヘラ削りを施す。

33、39が浮いた位置で、34~38、41~46は床面から、他は覆土出土である。

土壙11~14(Fig. 3、7)

土壙11~14は完掘後に床面や壁の形状から別遺構としたもので、発掘中にはほとんど弁別できていない。まず遺構の中央にトレンチを設定して土層を確認した。その段階ではトレンチの東西壁で土層の差異が見られたため、トレンチの西側をM12、東側をM13として取り上げた。掘り下げ途中に土壙13の形状を確定し、新たに土壙14を設定した。その結果図示したように土壙12は長径2.5m、短径1.3mほどで小判形を呈する3基ほどの土壙の切り合いであると考えるに至った。従って取上げ時のラベルと実際の出土遺構に若干の齟齬がある。それぞれ対照しながら記述する。なお土壙11は検出時に別遺構であると考え、大まかにその範囲内で出土した遺物を土壙11出土としたが、完掘後のプランを見ると、土壙12の一部と考えた方がよいと考えられる。いずれにしてもこの土壙群は、先述したように時期を置かず次々に掘られた廃棄土壙群である。

土壙11出土遺物(Fig. 10)

先述したように土壙11は、小判形を呈する土壙3基の切り合いである土壙12の一部と考えられる。土壙11出土として取り上げたのは、土壙12~3の西端部分に当る。実測図は48~52である。50は短脚の高台付脚。51は高台付の壺。大振りで踏張り気味の高台が付く。屈曲部からやや下位以下をヘラ削りする。以上は須恵器である。52は土師器把手。

土壙12出土遺物(Fig. 10, 11)

53~71は取上げ時のラベルがM12、トレンチであり、土壙12出土遺物である。53は土師器把手。54は須恵器の高台付脚。短脚である。55は須恵器壺の肩部である。頸部付け根は突堤状の段をなす。最大径部以下をヘラ削りしている。56、57は須恵器蓋である。いずれも天井部をヘラ削りする。56のつまみは低く、径は2.2cmを測る。灰白色を呈し、焼成が良くない。58~60、62は高台付の壺身。58、59の体部は外側へ緩く開く。高台は低く、底部端よりやや内側に付く。62の底部には板目状の圧痕がみられる。63は長頸壺の胴部である。稜を持って屈曲し、高台を持つ。胴部下半はヘラ削りを施すが、ほとんどナデ消され、底部付近に残るのみである。高台は外側へ踏張る。64も壺の胴部である。底部付近にヘラ削りが残る。胴部は丸みを帯びる。高台は63とよく似た作りである。内底部は不定方向のナデが施されている。65、66は土師器把手である。65は直線的に伸び、66は上方へ屈曲する。67~70は土師器壺である。いずれも口縁が外反し長脚で胴部が張る。外面は縱方向のハケメ、内面は削りを

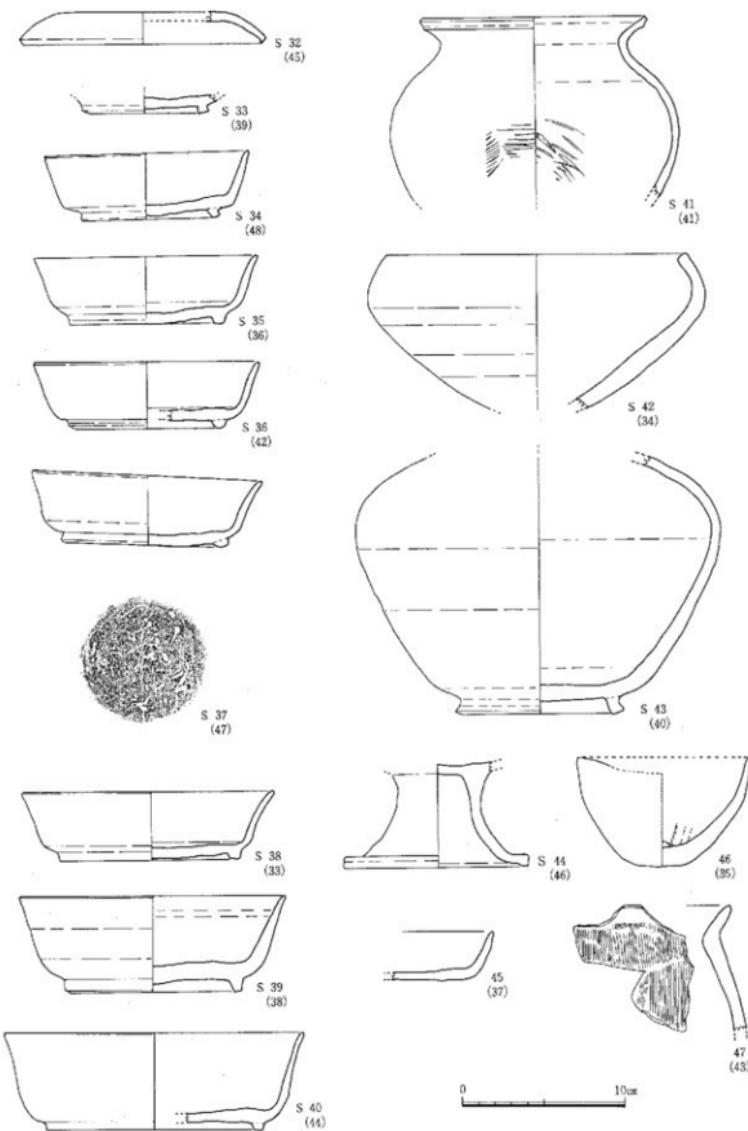


Fig. 9 出土遺物実測図 3 (土壤10 1:3)

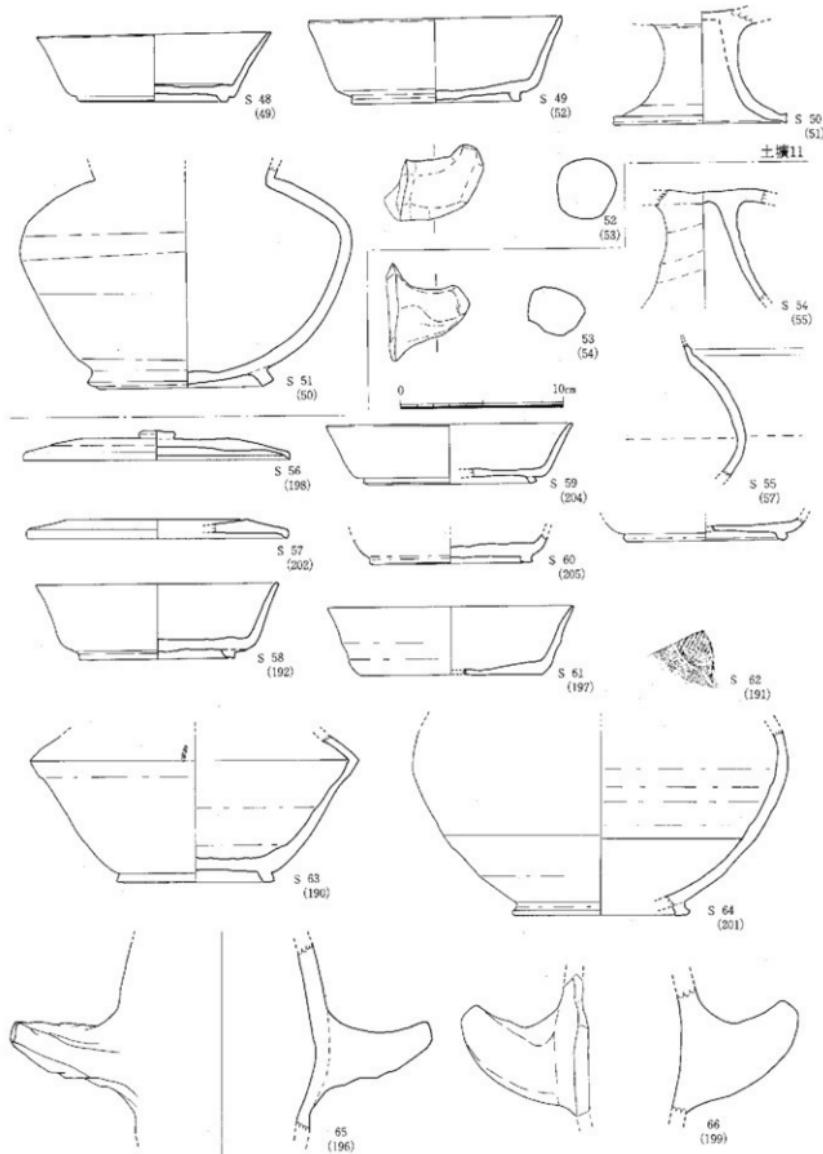


Fig. 10 出土遺物実測図 4 (土壤11、12 1:3)

施す。71は瓦質に近く、須恵器とも土師器とも判然としない。器形、器種とも良くわからない。調整は内外面とも雑なナデを施している。

Fig.11-72~Fig.13-97は取上げラベルがM13上面と記すもので、土壙12の東半区と土壙13のそれぞれ検出面に近いレベルで出土した物が混在している。

72は須恵器の高坏である。明赤褐色を呈する。脚端部は短く下方へ屈曲する。73は土師器の坏蓋である。調整は須恵器と同じ。天井部はヘラ削りする。74~77は須恵器坏蓋である。いずれも天井部はヘラ削りする。74は径が大きく、体部が外反する。75、76は径が小さく直線的に口縁に至る。76はつまみが剥落しているようである。78は須恵器の坏。高台が付かない。80は土師器の坏身である。高台は細身で高い。81は須恵器の高台付坏身。大形で体部は開く。高台は低く華奢である。82は須恵器の甕である。頭部は強く屈曲しつつ外反する。端部は稜の甘い坦面をなし、わずかに上方へ摘み上げる。外面は平行タタキ。内面は同心円當て具痕をナデ消している。83~92は土師器甕。83~86は小形の甕である。87~89は中形品。いずれも外面ハケメ、内面は削りを施す。また胴部はあまり張らない。93は土師器の小形の坏である。94は須恵器である。半環状の把手が付く器種である。鉢形のような器形になるのであろうか。図示した下半付近は回転ヘラ削りを施す。95は土師器甕の底部。96、97は土師器把手である。96は短く幅広で、縦断面三角形を呈する。97は細身で、牛角状に上方へ屈曲する

土壙13、14出土遺物(Fig.13、14)

Fig.13-98~Fig.14-121はラベルにM13、14とするもので、土壙13の掘り下げ中に土壙14を別遺構として確認した後の取上げである。但し土壙13と14の切り合いがわからず、遺物は混在して上がっている。Fig.13に図示した98~111は上位レベルから出土。Fig.14に図示した112~121は中位レベルの出土である。

98、103は須恵器の高台付坏である。体部は開く。98、99は高台が底部端に付く。101は高台がやや内側に着く。101は灰白色を呈し、焼成が良くない。104は須恵器蓋のつまみ部分。比較的高く、付け根ですばる。105は蓋の口縁部片。106は土師器の皿である。107は須恵器の皿に復元したが、底部が丁寧に回転ナデされていることや、口縁端が坦面をなすことなどから、蓋とすべきかもしれない。108は胴部が稜をもって屈曲する甕である。109は須恵器の甕。外面は平行タタキ。内面は同心円文の當て具痕が残る。110、111は土師器甕破片である。

112は須恵器蓋である。天井部はヘラ削りされないものである。体部は平板である。113~118は須恵器坏。113、114は小形品。113は灰白色で焼成が良くない。116、117は大形品である。116は径にやや疑問があるが、高台径を見るかぎり、117よりは大きいものである。高台の作りもしっかりしている。119は土師器把手である。120は土師器の甕。やや小形の物である。内面は削りを施すが、外面はナデられている。121も土師器甕の口縁部片。

土壙16(Fig.15)

調査区南東に位置し、平面は不整椭円形を呈する。長径は2.0mを測り、壁は緩やかに立ち上がる。
出土遺物(Fig.14)

124~128が土壙16出土遺物である。124~126は須恵器の蓋である。124、126は極めて焼成が悪く、器面の荒れがひどいため調整が良くわからないが、125は堅緻な焼成である。125の天井部はヘラ削りを施さない。127、128は須恵器の坏身である。127は径に比して器高が低く、浅めの器形である。128は蓋と同様焼成が悪い。

土壙17(Fig.15)

調査区南東に位置し、南側は調査区外に伸びる。平面は不整椭円形を呈し、短径は1.9mを測る。

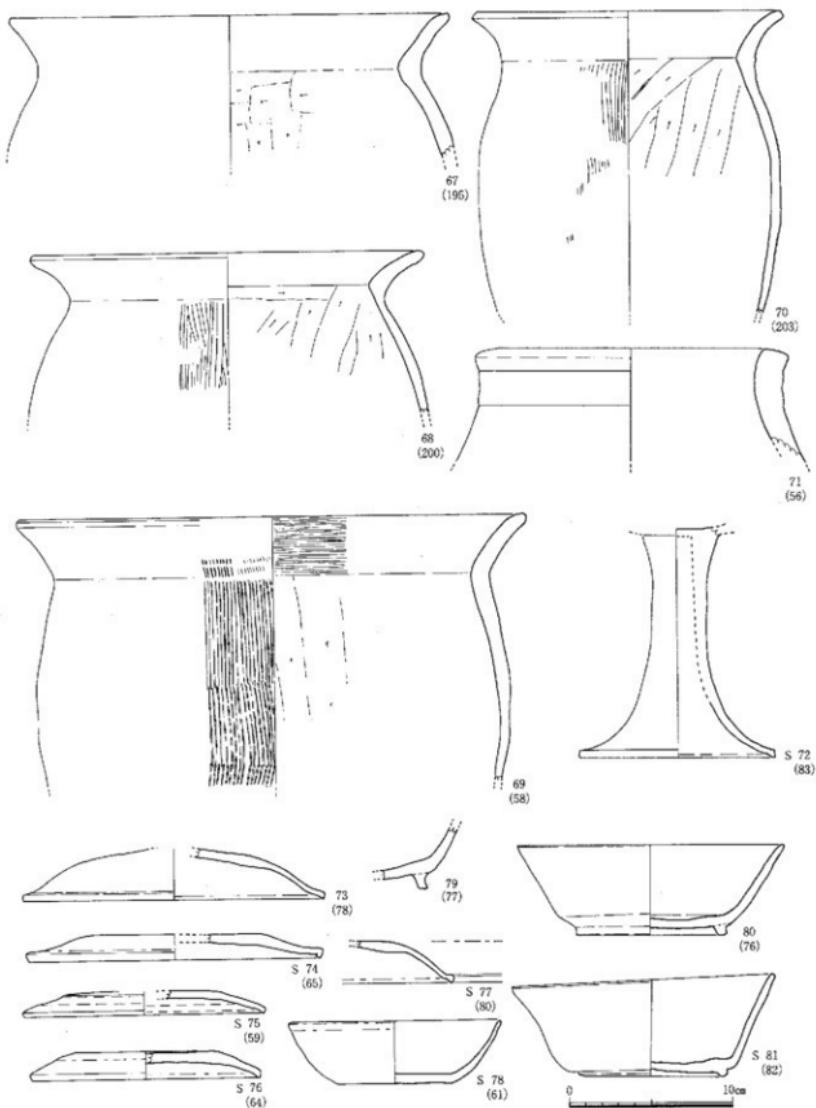


Fig. 11 出土遺物実測図 5 (土壤12、13 1:3)

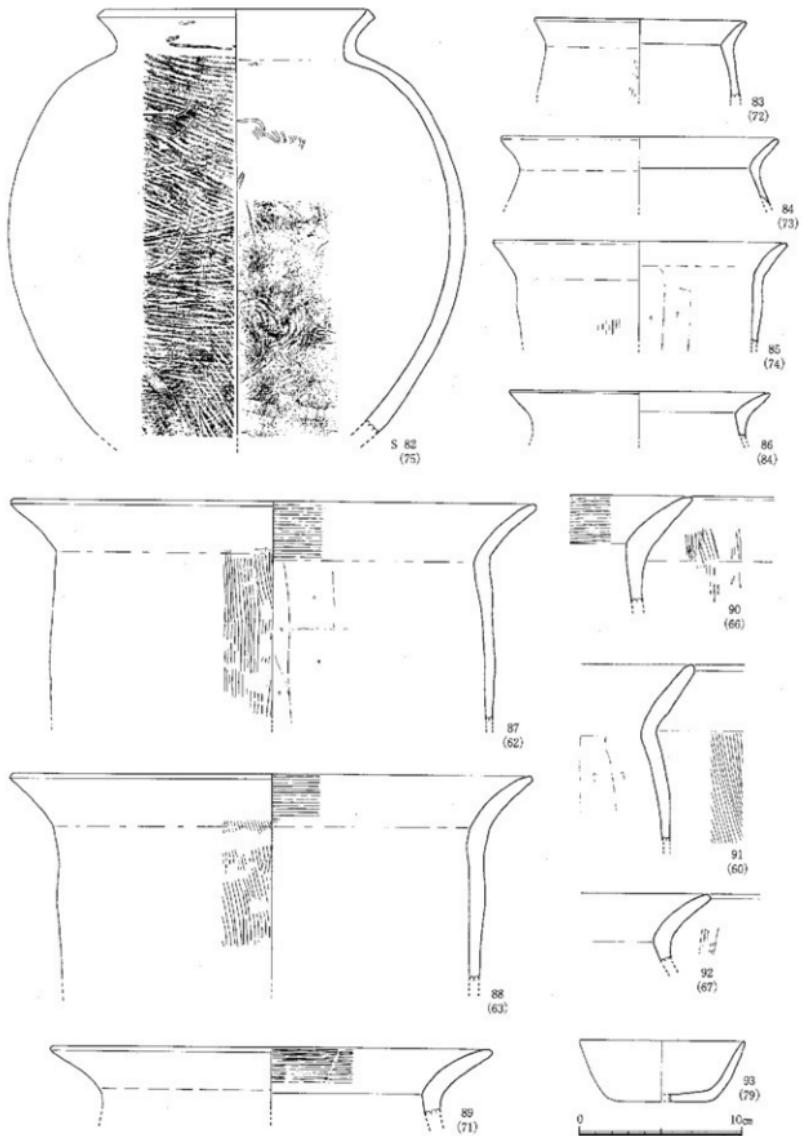


Fig. 12 出土遺物実測図 6 (土壤13 1:3)

出土遺物 (Fig.14)

129は土師器の柄である。断面はほぼ方形で、上面はやや凹む。どのような器形のものに取り付くのか不明である。

土壤19(Fig.15)

調査区南東に位置し、北側は攪乱に切られる。平面は不整長方形を呈し、短辺は1.7mを測る。

出土遺物 (Fig.14)

130～132は須恵器の蓋である。いずれも天井部にはヘラ削りを施す。132は径が大きく、つまみ径も2.8cmを測る。

土壤20(Fig.15)

調査区南東に位置し、南側は攪乱に切られる。平面は不整方形を呈し、底面に複数の凹みが確認された。須恵器、土師器が若干出土したが、図化に耐えるものはない。

土壤21(Fig.15)

調査区南東に位置し、平面は不整円形を呈する。径は2.2mを測り、遺構の底面北側は5cmほど低い。

出土遺物 (Fig.16、18)

土壤21からは比較的多くの遺物が出土している。133は須恵器の蓋である。天井部はヘラ削りを施さない。つまみは広くて薄い。134は焼成が悪いが、須恵器と判断した。高台のない皿である。135～144は須恵器の高台付坏。135、138は小形品。136～142は中形品。143、144は大形品である。体部には直線的に開くもの(135、141など)、直立気味のもの(142、143など)、直立しつつ端部で外反するものなどがある。高台にも底部端に付くもの(135、142など)、やや内側に着くもの(139)がある。145は須恵器高坏である。短脚で径の大きい皿形の坏部を持つ。口縁部は短く直立気味に屈曲し、端部は坦面をなす。全面に回転ナデが施されるが、脚部には絞り痕が認められる。

146～Fig.18～152は土師器の甕である。146～149は中形品。150～152は小形品である。いずれも外面ハケメ、内面削りを施す。153は土師器把手である。強く上方へ屈曲する。

土壤22(Fig.17)

調査区東端に位置し、遺構は調査区東側に広がる。深さは35cmを測る。

出土遺物 (Fig.18)

154は土壤22出土の土師器把手である。幅広の薄手で、平面形は隅丸三角形を呈する。上面をユビオサエにより凹ませる。

土壤23(Fig.17)

調査区北東に位置し、東側を攪乱に切られる。深さは25cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。

出土遺物 (Fig.18)

155～157が土壤23出土遺物である。155は須恵器の皿である。底部はヘラ切りの後未調整である。体部は回転ナデで、内底部は不定方向のナデが施される。156は須恵器の高台付坏。焼成は堅緻で、高台の作りもしっかりしている。157は土師器の壺破片。外面は縱方向のハケメ、口縁部内面に横方向のハケメ、胴部内面には削りを施す。

土壤24(Fig. 3)

調査区東端で検出した。ほぼ方形を呈する土壤である。深さは10cmほどで浅い。

出土遺物 (Fig.18)

158、159が土壤24出土遺物である。いずれも土師器の甕で、器面がかなり荒れているが、内面には削りを施している。

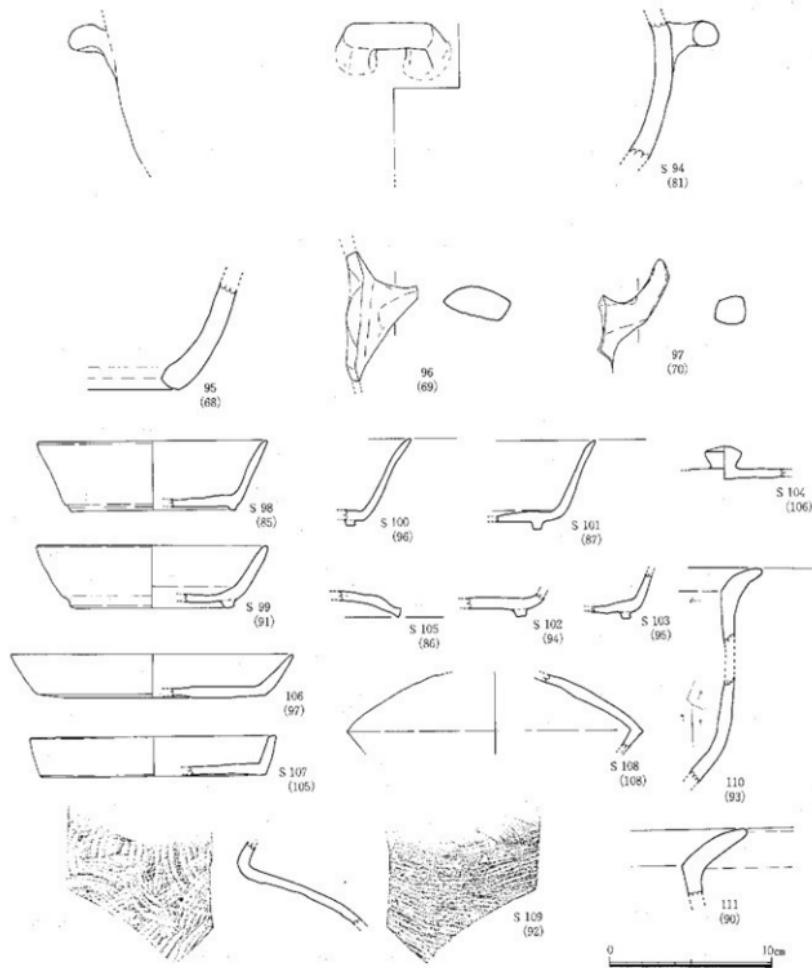


Fig. 13 出土遺物実測図 7 (土壤13、14 1:3)

土壤25(Fig.19)

調査区北東に位置し、遺構の東側は調査区外に伸びる。平面は長楕円形を呈し、短径1.8m、深さ15cmを測る。

出土遺物(Fig.18)

160～166が土壤25出土遺物である。160、161は須恵器の蓋。160は高い円柱状のつまみを持つ。つ

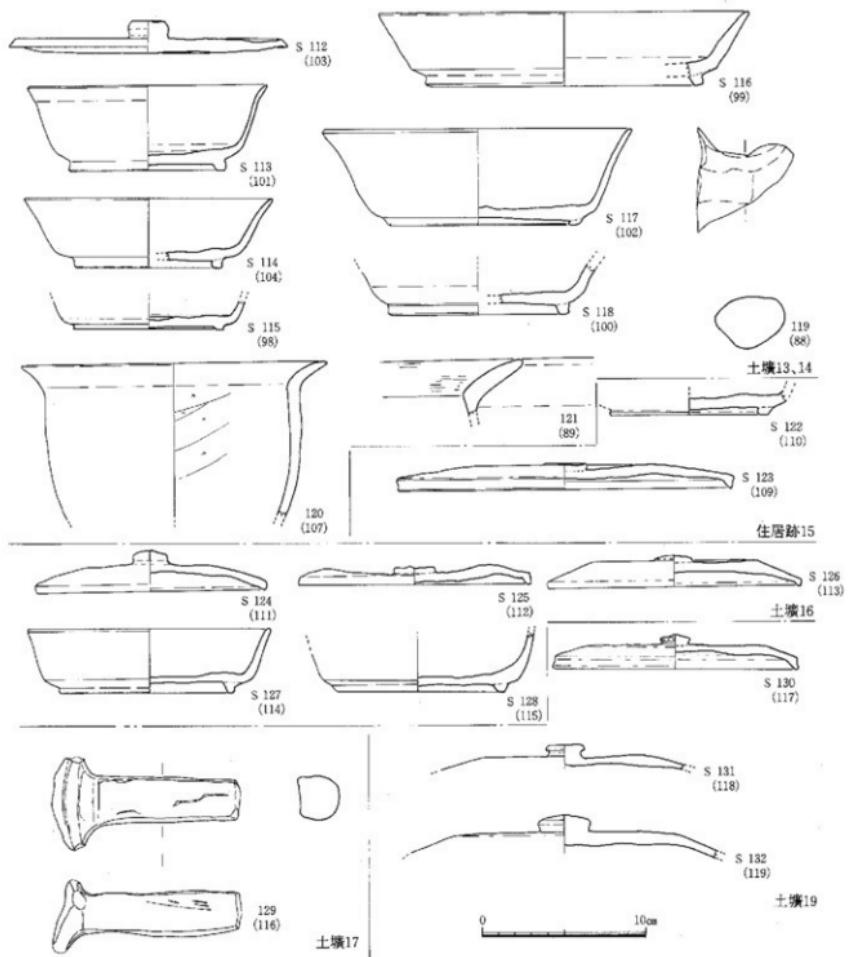


Fig. 14 出土遺物実測図 8 (土壤13~19 1:3)

まみ径は小さく1.6cmである。天井部にはヘラ削りを施す。161は円環状のつまみを持ち、口縁端は上下双方につまみだして幅広の坦面を作る。天井はヘラ削りを施す。金属器写しであろう。162、163は高台の無い須恵器坏。162は底部ヘラ切りで、底部に板目状の圧痕が見られる。163も底部ヘラ切り。162より更に細かい平行線状の圧痕が數単位見られる。164は焼成から土師器と判断した。高台付の坏である。器面が荒れているが、内底部は不定方向のナデか。165も土師器の皿である。体部は回転ナデ。

166は土師器の把手である。

土壤26(Fig.17)

調査区北東に位置し、平面は不整長方形を呈する。長辺3.6m、短辺2.2m、深さ50cmを測る。遺構の西側は削平されているが、東壁の立上りは強い。

出土遺物(Fig.18)

167～171が土壤26の出土遺物である。167、168は須恵器の高台付壺。167は体部が直線的に開く。168は直立気味になる。169は土師器の無高台の壺。体部は回転ナデを施す。170は土師器の皿。底部はヘラ切りの後未調整である。171も同様な土師器皿である。

土壤27(Fig.3)

調査区北側に位置する。(ほぼ)円形を呈する土壤で、径、深さとも1mほどである。検出面付近に粘土塊が置かれたような状況で検出され、土壤27はこの粘土塊を切って掘り込まれたような状況を示している。

出土遺物(Fig.20)

172は須恵器の皿である。底部はヘラ削りを施し、体部との境には稜が立つ。173～175は高台付の壺。いずれも大形品の範疇に入る物であろう。173は浅い器形のものである。内底部は不定方向のナデ。174は底部と体部との境に軽い稜が立っている。175は体部の歪が大きい。177は須恵器短頸壺である。口縁部は短く直立し、端部は坦面をなす。外面はカキメの後のナデ消したものか。

(3) 掘立柱建物

掘立柱建物として確認できたのは2棟である。

掘立柱建物1(Fig.21)

調査区南東に位置する。規模は2間×2間で、3.9～4.1mを測る。方位は調査区主軸にはば平行し、N-8.5°-Wをとる。柱穴の平面は不定形で長径60～90cmを測る。

柱穴出土遺物のうち圓化に耐えるものはないが、須恵器片、土師器片のみである。須恵器片のうち、古墳時代後期にまで遡りうる坏身片があるが、1片のみであり、建物の時期を示すものかどうかは、他に該期の遺構が皆無であるだけに、評価は難しい。

掘立柱建物2(Fig.21)

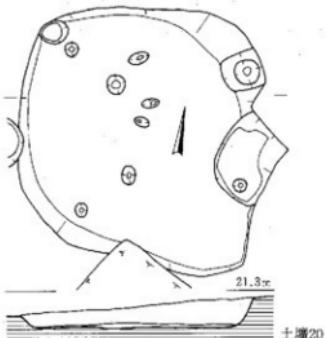
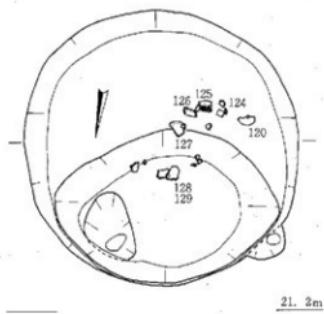
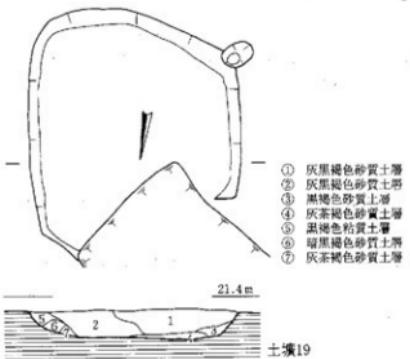
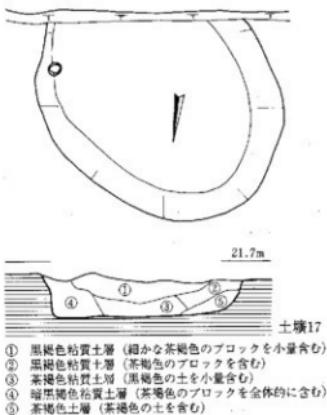
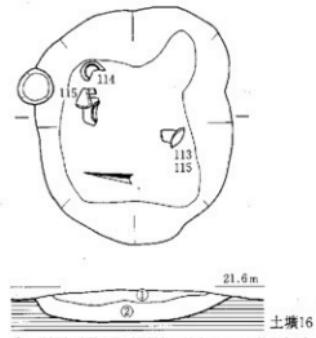
調査区北東に位置する。規模は2間×3間で、桁行5.5m、梁行3.5mを測る。主軸方向は、調査区主軸にはば平行しN-8.5°-Wをとる。柱穴の平面は円形で、長径30～50cmを測る。柱穴出土遺物のうち圓化に耐えるものはないが、須恵器片、土師器片のみである。須恵器片の高台部が1点あり、掘立柱建物の時期としても矛盾はない。

(4) 各遺構出土鉄器、石製品等

Fig.22に各遺構出土の鉄、土、石製品を掲げた。1、2は破片であり器種が良くわからないが、1は断面から刀子の破片、2は棒状の破片である。1は土壤6、2は土壤26出土である。3は土鍤である。土壤13出土。4は砥石である。石材は砂岩系で、上下面とも良く使われている。土壤13、14出土。5も砥石で、穿孔があり、提紙として用いられたものであろう。土壤9、10検出面出土。

4. 小 結

雑録第6次調査地点は、見てきたように廃棄土壤を主とした集落縁辺部にあたる地点と考えられる。周辺の調査成果も参考に、集落景観を模式的に示したのがFig.23である。この集落の中心部は5、8次調査地点であることは明らかである。ここでは56基の竪穴住居が検出されている。すべて竈を持ち、



0 1 m

Fig. 15 土壤実測図 3 (1:40)

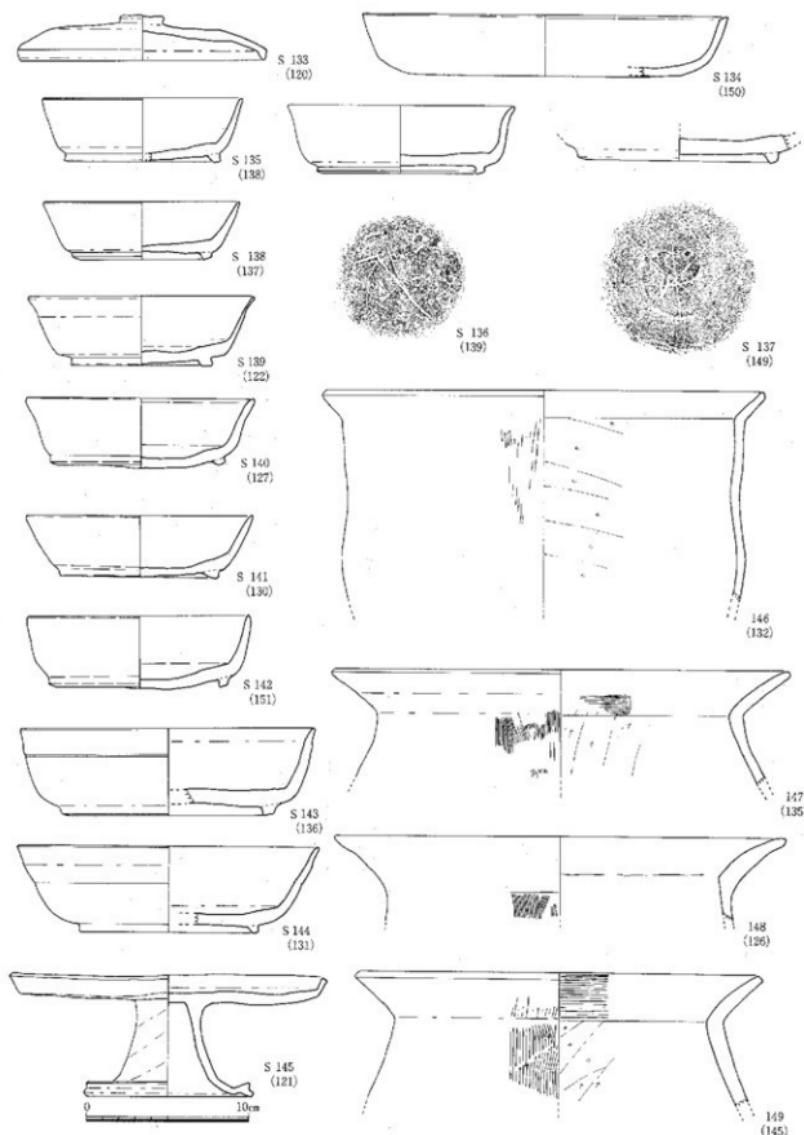


Fig. 16 出土遺物実測図 9 (土壤21 1:3)

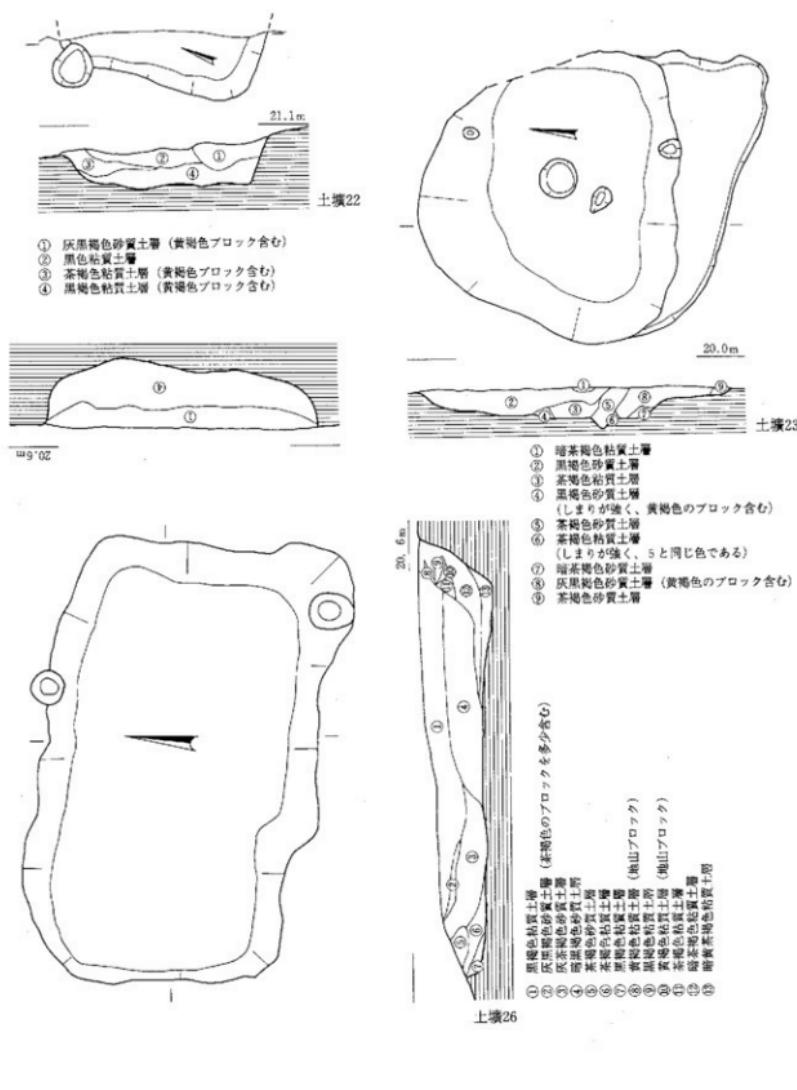


Fig. 17 土壌実測図 4 (1:40)

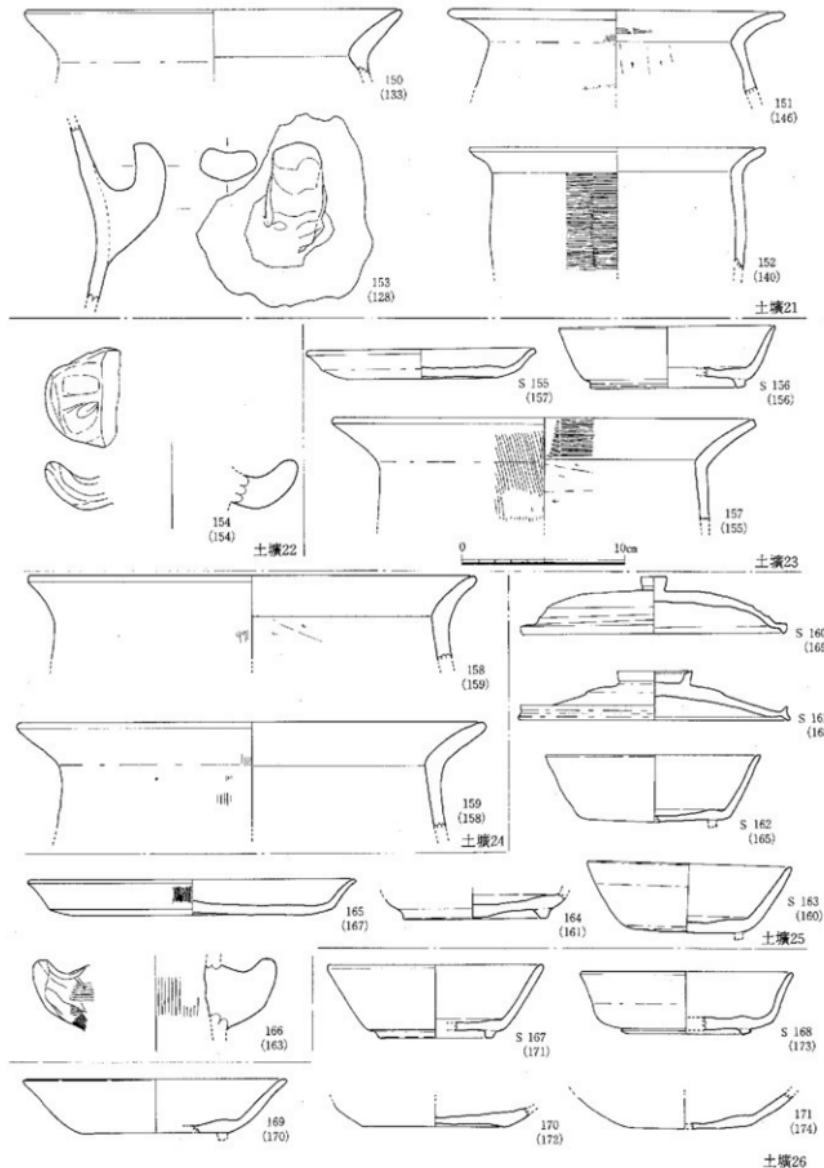


Fig. 18 出土遺物実測図10(土壤21~26 1:3)

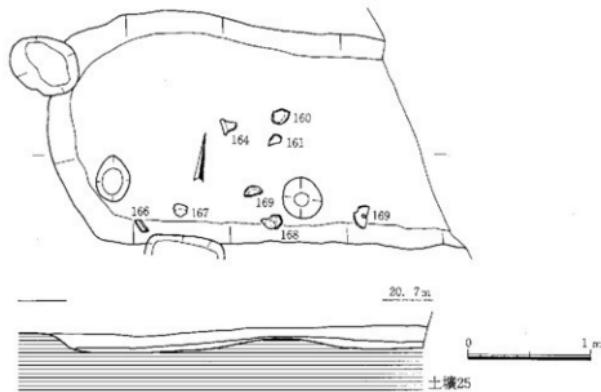


Fig. 19 土壤実測図 5 (1:40)

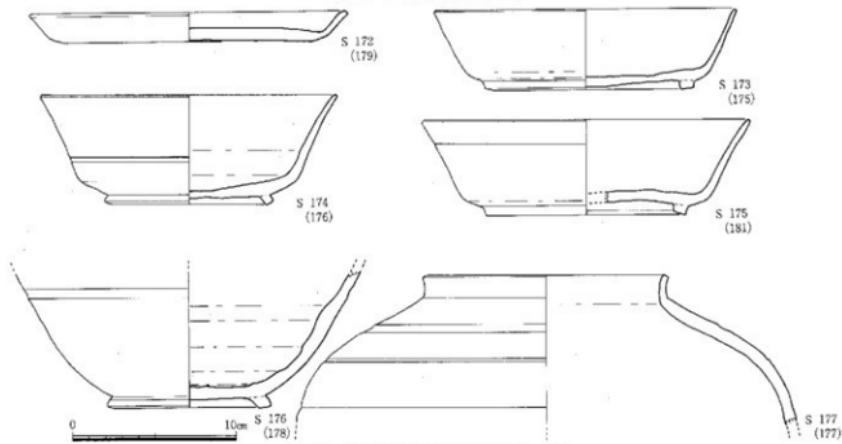


Fig. 20 出土遺物実測図11(土壤27 1:3)

企画性の高い住居である。筆者は専業の住居建設工人の存在も考えている。この集落の範囲であるが、東側は鹿児島本線を越えて、大きく広がることは無いようである。南東側に谷頭と考えられる池があるが、5次調査では池との境界まで住居が検出されており、この谷は北に開口すると考えられるからである。北側については不明である。昭南町の試掘で遺構が見つかった例もあり、また9次調査でも住居が検出されているので、かなり広がる可能性もある。しかし2次、3次地点まで広げるのは若干無理があるか。西側は1次、6次調査地点を大きく越えることはない。南側については不明である。さて5次調査周辺に限って見ると、住居跡の集中する区域と、掘立柱建物が目立つ区域に分かれようである。その想定範囲もFig.23に示した。ただし、5次調査地点の掘立柱建物群の検討が現時点では不十分なので、その結果如何によって改変がありうる。来年度の5次調査報告時に改めて検討したい。

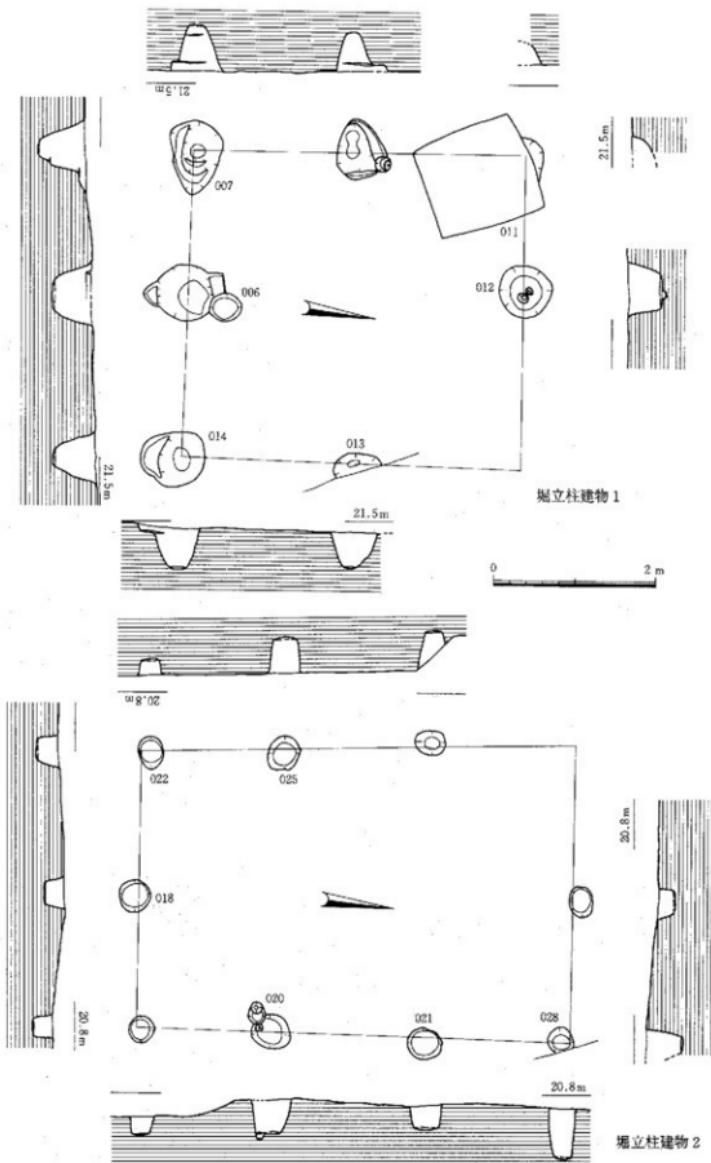


Fig. 21 挖立柱建物実測図(1:60)

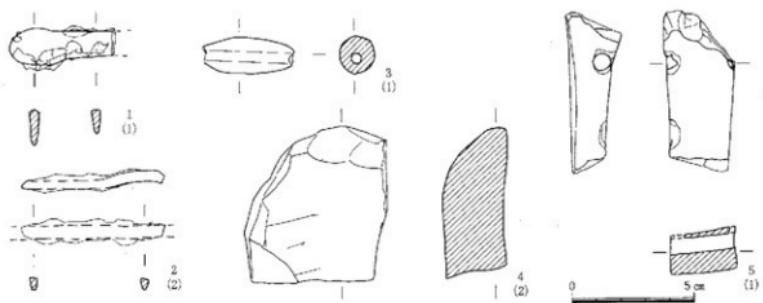


Fig. 22 出土遺物実測図(鉄、石、土製品 1:2)

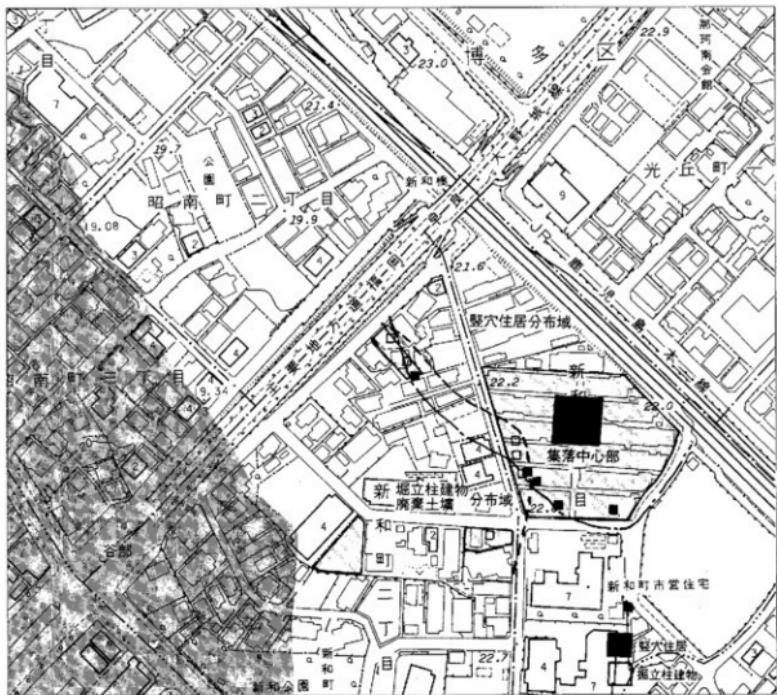


Fig. 23 雜體限遺跡の奈良時代集落(1:2500)

第3章 南八幡遺跡第7次調査

1. 調査に至る経緯

1996年1月8日付けで、藤義治氏より、共同住宅の建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は福岡市の周知の遺跡である南八幡遺跡内に位置しており、6次調査地点の正面に位置していることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて96年2月9日に試掘調査を行なった。その結果申請地内には遺構が検出された。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は、藤氏との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなった。当時第2係員である宮井は、近接する新和町で市営住宅の建て代えに伴う雜餉隈遺跡第8次調査に従事しており、一時この調査を中断して南八幡7次調査に入ることになった。調査は1994年3月4日に着手し、3月18日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝 第2係長 山口譲治

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 西出結香

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査補助 平田こずえ、鈴賀智幸（別府大学）、井上蘭子（九州大学、現福岡市教育委員会）

調査作業 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 森園弘子 平田浩美 森山キヨ子
石川洋子 鍋山治子

整理作業 西村智道 井上蘭子 大石加代子 林山紀子 太田順子 武田祐子

また調査時には、藤氏に多くのご配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

遺跡調査番号	9560		遺跡略号	MHM-7
調査地地番	福岡市博多区元町1丁目20-2			
開発面積	226.98m ²	調査対象面積	220m ²	調査面積
調査期間	1996年3月4日～3月18日		分布地図番号	12-0051

3. 調査の記録

今回の調査は、180.5m²という狭い面積である。検出した遺構は、住居跡3基、長方形の土壙2基、溝1条、ピット等である。ピットは一定の深さを持つしっかりしたものも多いが、建物として把握できたものはない。住居跡は奈良時代に属するものであるが、土壙からは遺物の出土がなく、切り合いで住居跡より古いということがわかるだけである。なお調査区の南半区を中心に搅乱が多く、調査区はかなり荒らされている。

（1）検出遺構

住居跡1 (Fig.26)

調査区の南端で検出した住居跡である。南側が調査区外に出ており、また北東のコーナーも搅乱により壊されている。平面形は1辺4.5m程の方形を呈する。遺存は良く、検査面からの深さは50～60cmを測る。床面には主柱穴は確認できない。壁溝は竈のある壁には切られていないようである。西壁に竈を持つ。壁から外側に半円形の張出しを掘り込み、煙道とする。竈本体は人為的に破壊されたもの

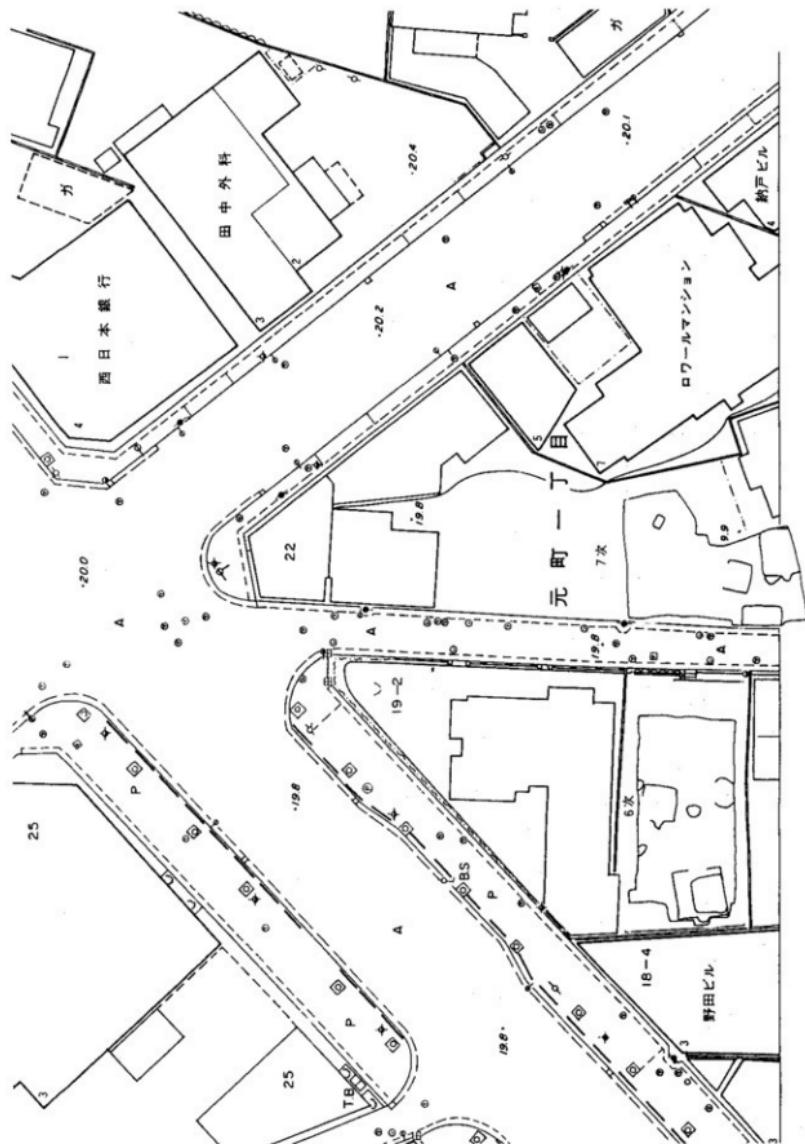


Fig. 24 調査区位置図(1:500)

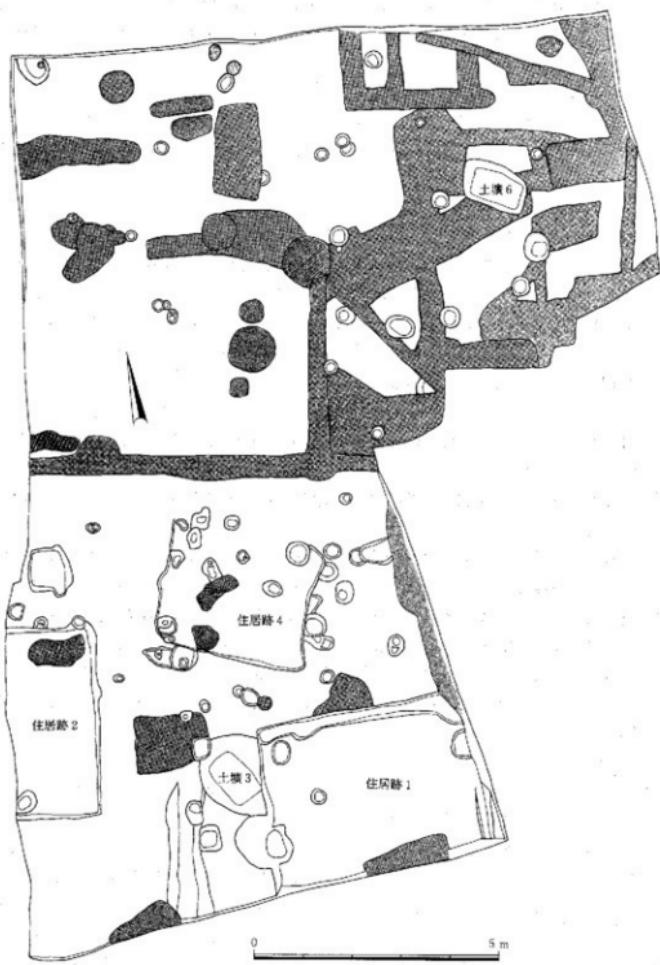


Fig. 25 調査区遺構配置図 (1:100)

と見られ、竈材である白色粘土がブロックとなり、覆土とともに散在している。竈付近の覆土には土師器壊片などが散乱し、廃棄に伴う祭祀行為を窺わせる。図示したアミ掛け部分は、床面直上で検出した白色粘土で、竈袖の残存の可能性も考えられる。また竈と対称する東壁際にも白色粘土が散在している。竈掘方は楕円形を呈し、竈床面は、住居床面より10cmほど深く掘凹めている。住居跡は人為的に埋め立てられたような状況を示しており、覆土中からコンテナ8箱に及ぶ多量の遺物が出土している。

住居跡2 (Fig. 26)

調査区西端で検出した。東辺の長さ4mを測り、1辺4mの方形に復元されよう。遺存は良く、検出面からの深さ40cmほどを測る。調査区内では竈、主柱穴等の施設は検出されていない。北壁際に白色粘土塊がある。コーナーは隅角がシャープである。

住居跡4 (Fig. 26)

住居跡1の北側、住居跡2の東側で検出した。実際は住居跡とするには疑問がある。平面形は3m×2.5mほどの略方形を呈する。住居跡1、2に比べると極めて浅く、検出面からの深さは10cm足らずである。床面にはいくつかピットがあるが、主柱穴として抽出されるピットはない。また竈や、その残滓である白色粘土も検出されなかった。これらの点からも住居跡1、2と同様な規模、機能を持つ住居とは考えがたい。ただ、浅い遺構とは言え、検出時にはプランはしっかりとしており、人為的な掘り込みが行われていることは確実である。

土壤3 (Fig. 27)

調査区の南端で検出した。住居跡1に切られる。しまりのない黒色土を覆土とする。検出面では半円形を呈するが、床面は1×0.5mほどの長方形を呈し、本来長方形を呈する土壤であったと考えられる。検出面からの深さ1.2mを測る比較的深い土壤である。出土遺物が全くなく、時期は不明である。

土壤6 (Fig. 27)

調査区北東端で検出した。平面形は長方形を呈し、1.3×0.8mを測る。検出面からの深さ80cmほどを測る。土壤3とは規模、形態ともほぼ同一であったものであろう。この土壤6からも遺物は全く出土していない。このような土壤に類似した遺構としては、西側に隣接する6次調査地点や、麦野B3次調査地点、井戸遺跡6次調査地点などで検出されている。いずれも比較的深く、平面形が長方形を基本とする。遺物が皆無に近い点も共通する。南八幡6次調査地点では調査者は落とし穴の可能性を考えている。有力な可能性として否定はしないが、時期が明らかでない現状においては、判断するには慎重を期しておきたい。

(2) 出土遺物

出土遺物は総量でコンテナ13箱である。その内のほとんどは住居跡1からの出土である。なお壺類、皿類の須恵器、土師器の区別は焼成を根拠としている。

住居跡1出土遺物 (Fig. 28~32)

1は土師器の高台付の皿である。口縁部は屈曲して受口状を呈する。底部外面は回転ヘラ削りを施す。2~14は須恵器の皿である。径17cmほどの大形品(7、13など)と、径13cmほどの小形品がある。底部はヘラ切りの後ナデを施すものがほとんどであるが、3、7はヘラ切りのままである。とくに7は粘土紐の接合痕が顕著に残る。15は小形品の底部である。壺であろうか。底部と体部の境は削りを施す。16は直口の鉢である。端部は外側へ摘み出して坦面を作る。胴部下半には回転ヘラ削り痕が残る。外底部にもヘラ削りが見られる。17は土師器高壺の脚である。18は須恵器の短脚高壺の脚部である。19は土師器の鉢である。内外面に回転ヘラ削りを施し、薄く仕上げている。口縁端も薄く尖らせる。20

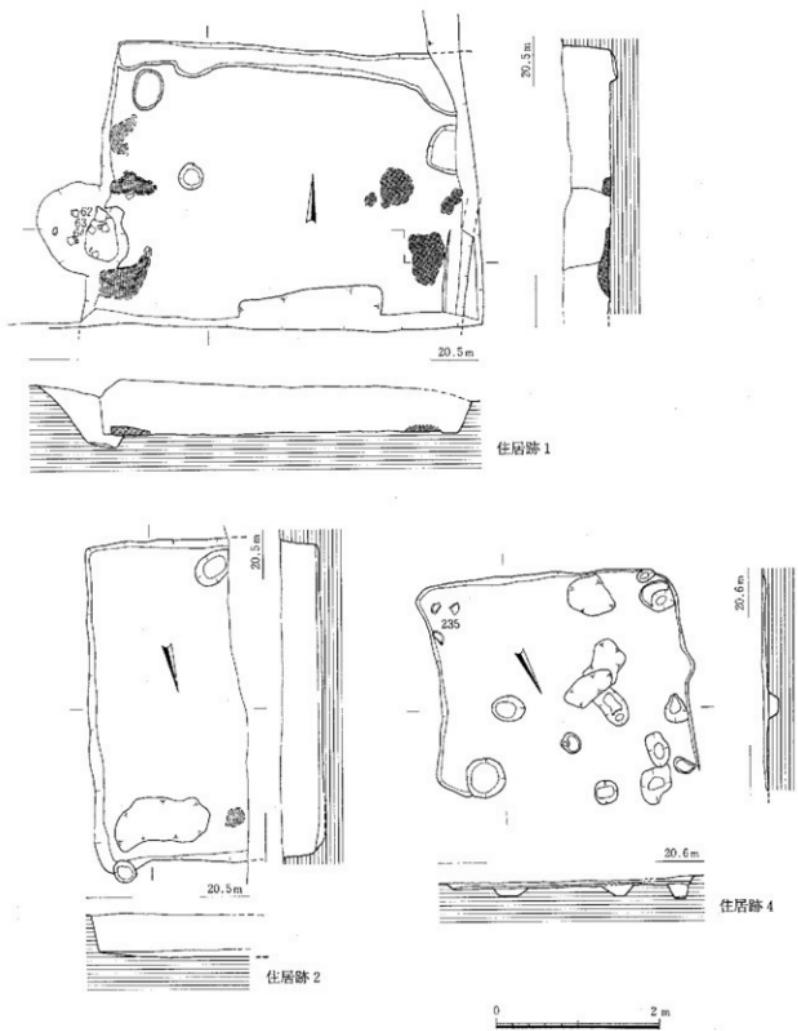


Fig. 26 住居跡実測図(1:60)

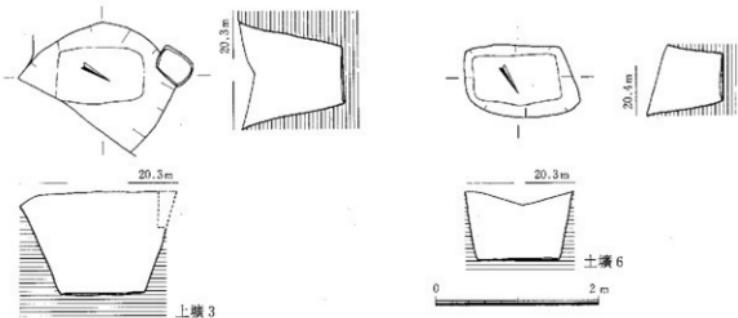


Fig. 27 土壌実測図(1:60)

は土師器の壺である。口縁部は短く屈曲して外反する。胴部外面には回転ヘラ削りを施す。21は須恵器脚部である。端部は段をして屈曲する。22は耳付の壺の肩部であろう。肩の張る器形で、肩部の最大径部を挟んで上下に耳を持つ。いずれも四角錐台形を呈し、縱方向に穿孔する。耳は同一線上にではなく、ずれている。

Fig. 29-23-25は十輪器の坏蓋である。天井部にはヘラ削りを施す。つまみは23、25は円柱状に近く、24は宝珠形を呈する。26-35は須恵器の坏蓋である。天井部はすべてヘラ削りを施していない。天井部が深みを持つもの((31、33、34など)と、扁平なもの(26、29、32など)がある。つまみには宝珠形のもの(29、33、35など)、上面が平坦で円柱状に近いもの(34など)があるが、ほとんどは上面が平坦で付け根ですばまる。36-47は須恵器の高台付坏である。小形品(36、39、40)、中形品(37、41-47)、大形品(43)がある。高台は低く華奢で、壺部はつぶれた様になる。高台は底部と体部の境界よりやや内側に着くものが多い。体部はいずれも開く器形である。口縁部は薄く尖らせる。48は高台付の壺底部である。高台はしっかりした作りで、踏張り気味に付く。端部は坦面をなす。体部の遺存部にはヘラ削りが見られる。49-51は高台の無い坏である。49は体部と底部の境に稜が立つ。底部に板目状の圧痕が見られる。51は口縁端部で短く外側へ屈曲する。52は土師器の高台付の坏である。53は土師器の高台の無い坏である。底径が小さく体部が大きく外側へ開く。底部はヘラ削りを施す。54-57は土師器の皿である。いずれも底部にヘラ削りを施す。

Fig. 30の58-74は土師器の中形壺である。口径は25-30cmほどを測る。調整はほぼ共通し、外面を縱方向のハケメ、胴部内面に削りを施す。口縁部内面に横方向のハケメを施す例が多い。口縁部は多样で、後をもって直線的に開くもの(69、73など)、短く屈曲して開くもの(58、72など)、緩やかに屈曲しつつ開くもの(59、74など)等がある。

Fig. 31の75-88は土師器の小形壺である。口径は15-20cmほどを測る。調整、器形などは大形品と共通する。口縁部形態も大形品に見られるようなものはそろっている。89は土師器の鉢である。底部は若干平たくなっている。口縁部は短く屈曲する。90は土師器の把手付の壺である。外面は口縁部附近をヨコナテし、その下にハケメを施す。器面の調整終了後に把手を貼付している。沈線は把手の位置決めの割付け線であろう。内面は削りを施す。口縁部端は坦面をなす。91-93は土師器鉢の底部である。93の外面端部には格子目文の叩き目痕が見られる。94は土師器の把手である。95、96は土師器の底部

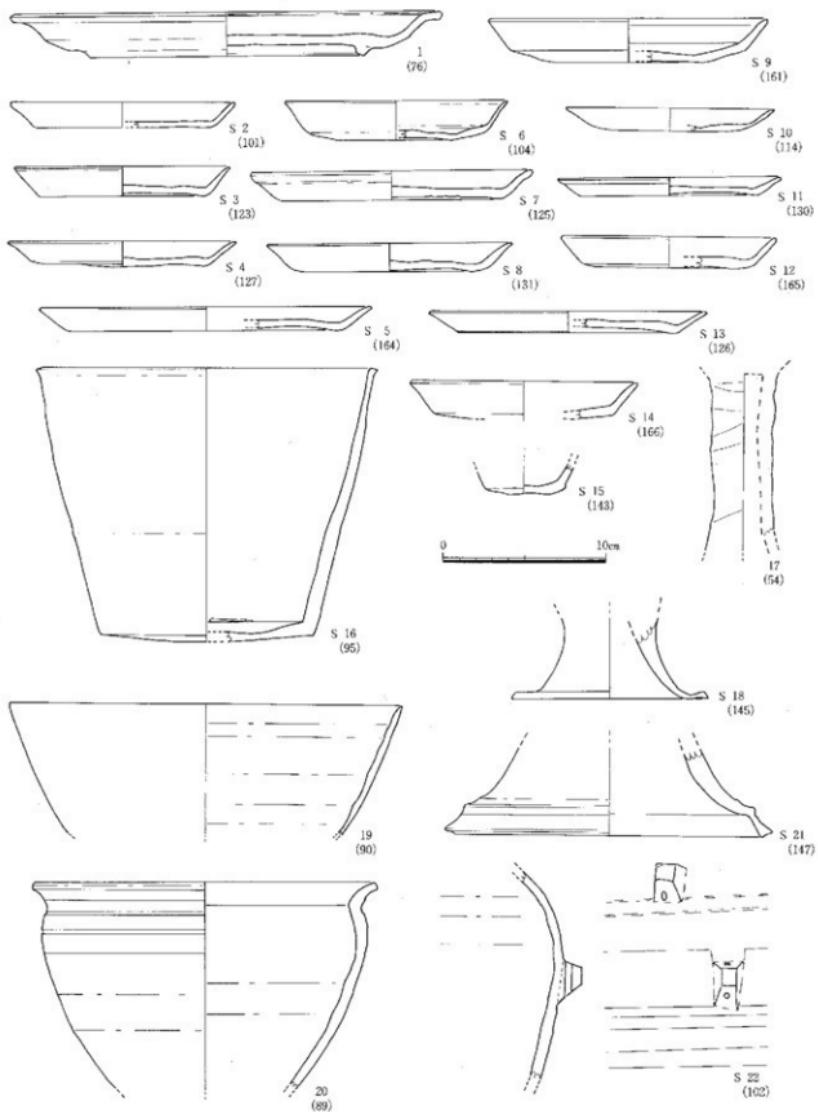


Fig. 28 住居跡 1 出土遺物実測図 1 (1:3)

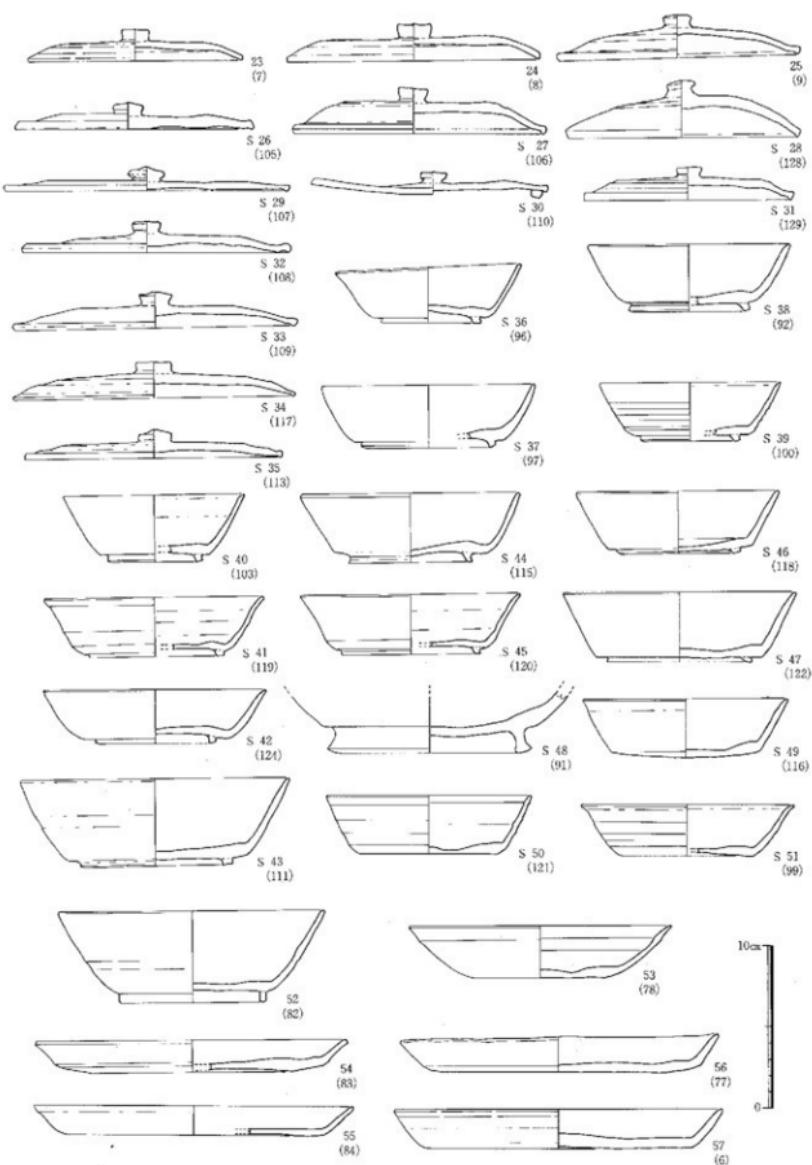


Fig. 29 住居跡 1 出土遺物実測図 2 (1:3)

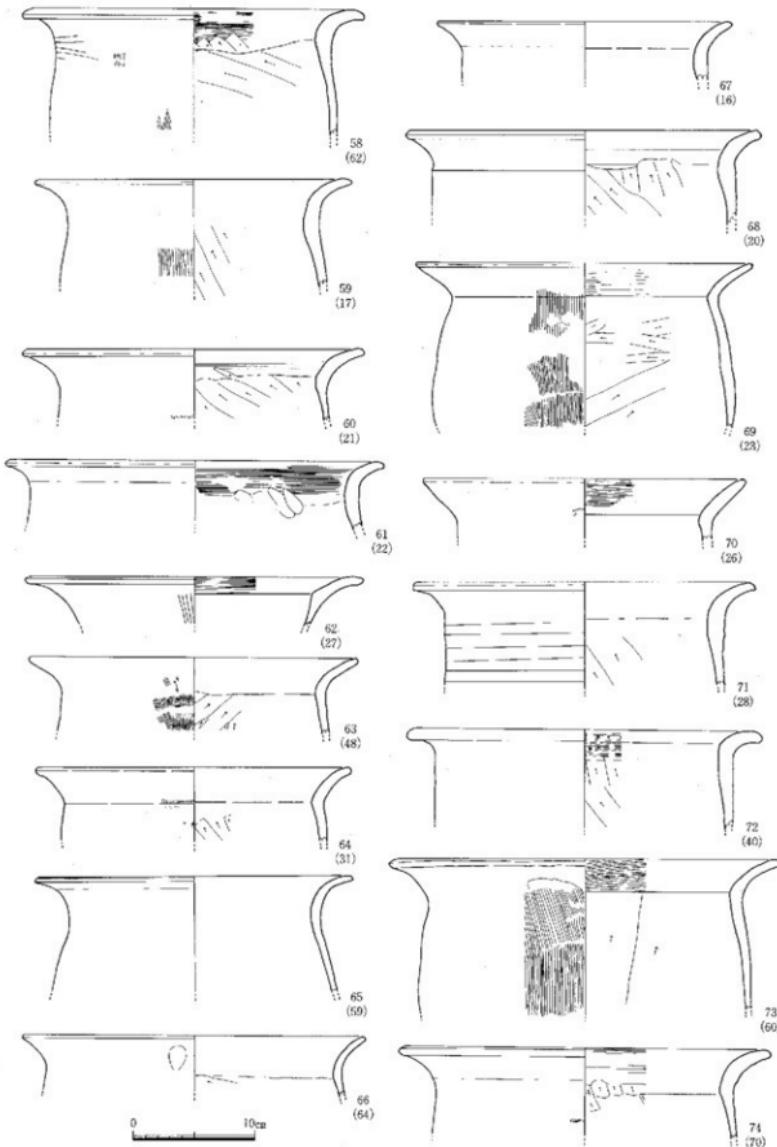


Fig. 30 住居跡 1 出土遺物実測図 3 (1:4)

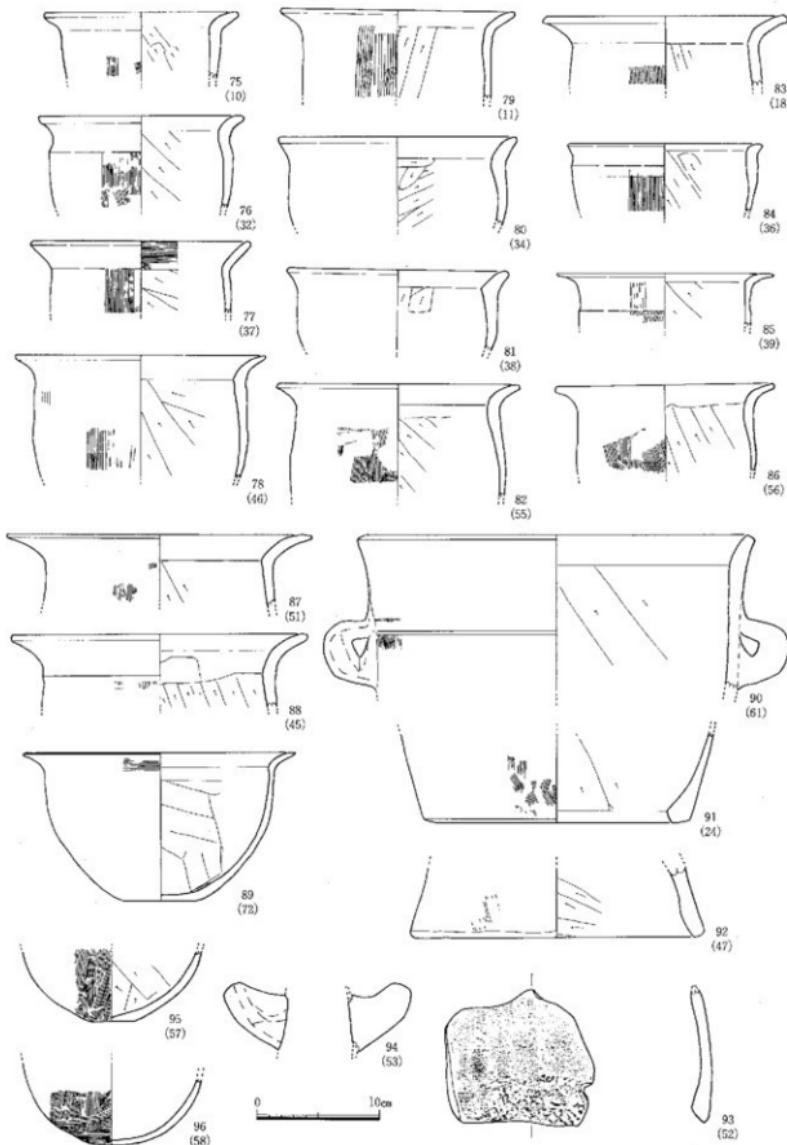


Fig. 31 住居跡 1 出土遺物実測図 4 (1:4)

である。95はやや平たくなり、96は丸底である。小形甕か、鉢の底部であろう。

Fig.32の97～103は竈周辺で出土したもので、竈廻棄の際の祭祀に関するものと考えられる。97は土師器蓋の小片である。98は須恵器蓋である。つまみは円柱状を呈する。天井部には削りを施さない。99は高台付の須恵器坏である。100、101は須恵器皿である。102、103は土師器甕。102は中形品。103は小形品である。119は住居跡1出土の砥石である。上下端を欠く。四面とも良く使われている。

住居跡2出土遺物(Fig.32)

Fig.32の104～116が住居跡2出土の遺物である。104は須恵器甕の頸部片である。口縁端部を欠く。端部付近に段を持ち、その下に二段に波状文を巡らせる。105は須恵器の蓋である。つまみは円柱状を呈する。焼成が悪く器面が荒れているが、天井部のヘラ削りは無いようである。106は口縁部で緩やかに屈曲する蓋である。天井部にはヘラ削りを施す。107、108は須恵器の皿である。109は須恵器の高台の無い坏。110～114は須恵器の高台付の坏である。115は須恵器甕底部である。高台は若干踏張り気味になる。胴部は直線的に広がる。下半部はヘラ削りを施す。116は土師器甕の底部である。

住居跡4出土遺物(Fig.32)

Fig.32の117、118が住居跡4出土遺物である。117は須恵器蓋。つまみは断面逆台形を呈する。口径の割に小振りのつまみである。天井部はヘラ削りを施さない。ナデも粗雑で、ヘラ切りのまま残る部分が多い。118は須恵器高台付坏。やや浅めの器形である。

(3) 小結

今回調査では、調査面積も狭く、検出遺構も豊富とは言い難いが、それでも南八幡遺跡の集落の輪郭を明らかにした。7次調査地点は、6次調査地点に隣接しており、合わせて考えて見たい。南八幡遺跡は麦野、雜飼隈遺跡群内で唯一古墳時代の住居がまとまって見つかっている遺跡であるが（1次、2次）、該期の遺構は6次、7次とも検出されなかった。南八幡遺跡内における古墳時代集落の規模、範囲と、その推移を明らかにすることは、その後の古代集落とのつながりを考える上でも重要な課題と言えよう。また今回調査では、住居跡1で、住居の廃棄に伴う土器の大量投棄という現象が見られた。このような例は麦野、雜飼隈遺跡群においてはまだ知られていない。住居跡1は、その形態の特徴としては他の住居と変わることが無く、規模も大きめの部類に入るが、きわだてて大きいと言うことは無い。このような住居が何か特殊な用途を持つものかどうかは、まだ疑問とせざるをえない。

麦野、雜飼隈遺跡群は、最近になって調査が急増してきた地域であり、今後の調査成果に期待したい。

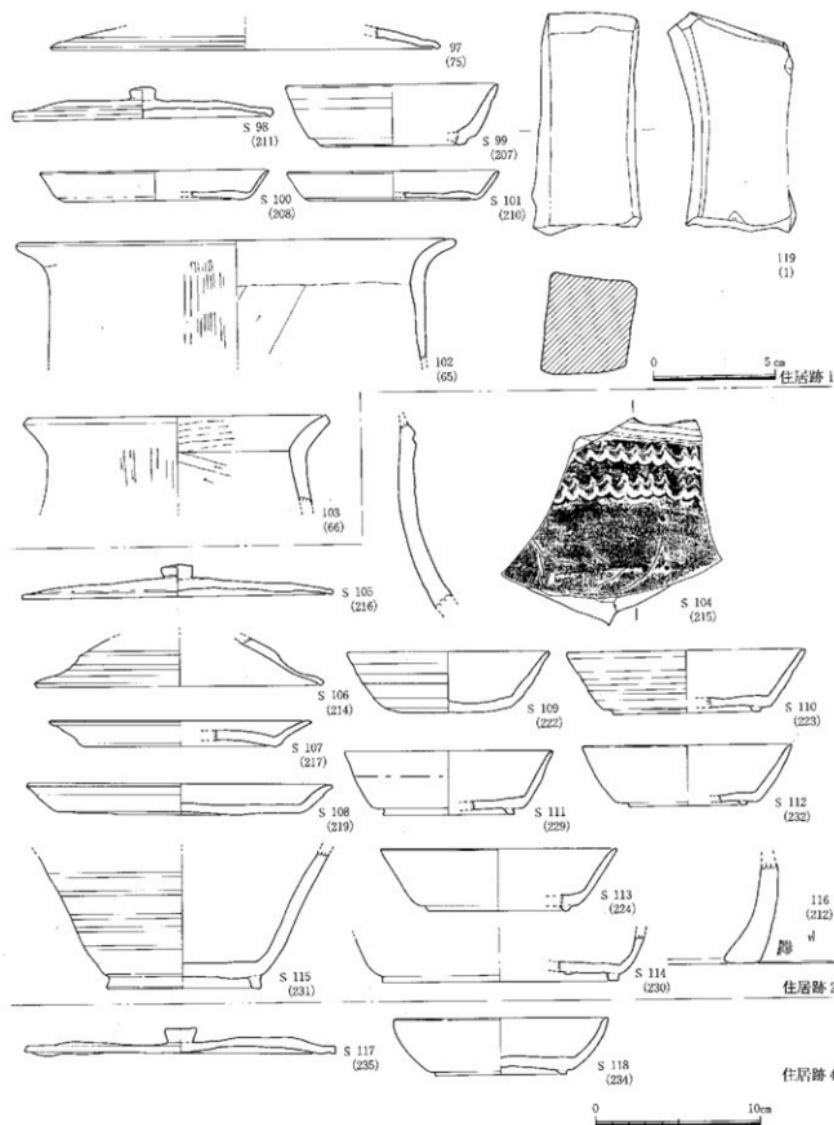


Fig. 32 住居跡 1 出土遺物実測図 5 住居跡 2、4 出土遺物実測図 (1:2 1:3)

図 版



(1) 土壙11~14 (東から)



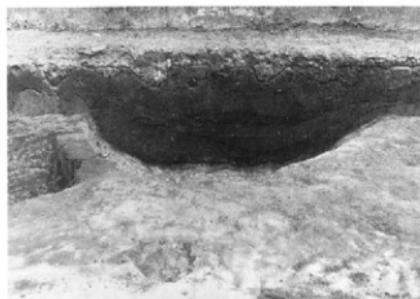
(2) 掘立柱建物 1 (西から)



(1) 住居跡15（北から）



(2) 土壌5土層（北から）



(3) 土壌1土層（北から）



(4) 土壌9土層（北から）



(5) 土壌12土層（東から）



(6) 土壌21土層（北から）



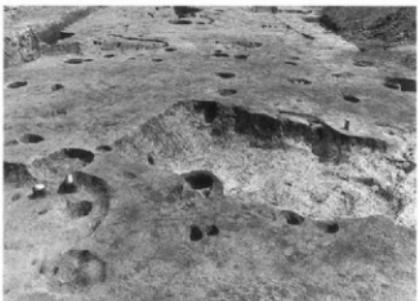
(1) 土壌10 (東から)



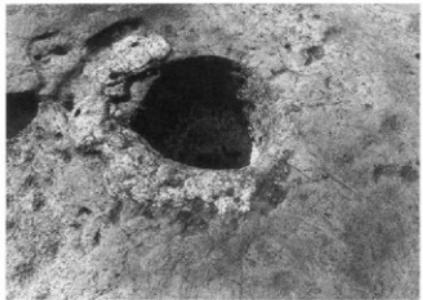
(2) 土壌21 (西から)



(3) 土壌25 (北から)



(4) 土壌26 (北から)



(5) 土壌27 (北から)



(1) 西半区全景（北から）



(2) 東半区全景（北から）



(1) 南半区全景 (北から)



(2) 住居跡 1 (北から)



(1) 住居跡2（北から）



(2) 住居跡1竪（東から）



(3) 北半区全景（西から）

雑餉隈周辺遺跡群

雑餉隈遺跡 6次調査

南八幡遺跡 7次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書第528集

1997年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 (株)トータルプリンティング博多
福岡市南区大楠2丁目21番1号

